

325
165

回顧



始



32
16

村海松
与先村
俊名介
吉正石
着序序序

回

顧



顧

大正
1.10.22.
内交

序

村上俊吉翁は組合教會の先輩にして我邦基督教界の
 元老たり、其人と爲り温厚篤實眞に君子の風あり、故に
 一たび翁に接する者は其靄然たる温容に對して敬慕
 の念禁じ能はざる者あり、復た誰か其曾て豪飲放歌の
 一浪士たりしに想ひ到る者あらむや、然かも翁は基督
 教の恩化に浴して新生涯に入り、終養丹練以て謹嚴篤
 行なる牧師と仰がるゝに至れり、基督教傳道に従事せ
 らるゝこと殆ど四十年、傍ら平易通俗の筆を執て宗教
 文學に貢獻せられたるの功は吾人の忘るゝ能はざる

序

所なり。
 翁今や往時を追懐し其閱歴の一斑を綴り多年の経験を記述し題して回顧と云ふ本書即ち是なり予は此自叙傳が教界の後進者を誘掖し併せて求道者の好指針となり以て世を益するこの鮮少ならざるべきを信ず。予や翁の交を辱うする茲に年あり此書を公けにせんとし一言を徵せらるゝに當り敢て固辭する能はざる所以なり。

大正元年八月中浣平安の舊都に於て

原 田 助

序

村上先生の事を考へるに直に吾が青年時代に想到するのである。確か明治十三年の頃と憶ゆ當時我輩は築地大學の幹事をしてゐたが其時神戸七一雜報社より發刊する週報七一雜報を喜んで讀んだものである。村上先生は其雜誌の編輯長で今村謙吉氏が其社長であつた。

當時我輩は文章軌範や古文眞寶や太平記などを讀んで、荐りご文章を稽古してゐたから、無暗に新聞や雜誌に投書したものである。而かして大抵は没書ごな

つたが、日々新聞へ投書して英學を勸むる文、七一雜報へ投書して宣教師に忠告すといふ一論文が採用せられて、其紙上に掲載されたが、當時我輩の喜びといふものは、實に非常なものであつた。今も猶其時の嬉しさを記憶してゐるほどである。

七一雜報は勿論宣教師の經營してゐるものであつた。築地大學も宣教師の設立してゐるものであつた。そして此宣教師の金でめしを食つてをる相方が宣教師に忠告するといふ論文を書きもし掲げもしたのであつたから、當時一寸やかましい問題を惹き起した。村上先生の方は能くは知らぬが、我輩一個として、餘

り宣教師を馬鹿にしたものであるから、築地大學に於ても、神學校に於ても、追々不首尾となつて、遂に一致教會を飛び出すの端を發いたのである。村上先生と我輩とは其當時からさういふ關係を有してゐたのである。

其處で我輩が一致教會を飛び出したか、趁ひ出されたか、何しろ爾來宣教師のめしを食はんご決心して、大阪へゆき暫く政治新聞に足を入れやうとした時、今村氏と村上先生より前日の縁故があるから、七一雜報の編輯員の一人となつてくれと申込まれた事がある。勿論、矢張宣教師の金で衣食する事ゆゑ、斷つてゆかな

かつたが、何しろ其當時より村上先生を先輩と思ひ、又恩顧ある人と思つてをるのである。明治十七年頃七一雑報が改名して福音新報となつた時、我輩は備中高梁の牧師より轉じて、其主筆となり、村上先生は専ら傳道の方に従事せられてをるやうであつたが、今度は村上先生が寄書家となり、我輩が編輯長となつてをつたのである。それより我輩は方針を轉じて、教育界に入り、又著述に従事し、爾來村上先生と關係を有せざる事、茲に三十年。勿論時々互に消息を通じ、又稀に相見ることなきにあらざるも、久濶にすこしてゐたのである。處が今回、警醒社主人が此回顧なる原稿を持參して、村

上氏の依頼なり、何か一文を序せよといふのである。がそれは拒むどころか、實に好んでも書きたいのである。一寸爰に一言しておくが、此の警醒社主人福永文之助氏も亦同じやうな關係を有してゐる一人である。予が宣教師に忠告すといふ一文を七一雑報に投書したる時、福永氏は既に其社の番頭であつたのである。而して爾來三十年の久しき間、予の書の出版を悉く福永氏に託し、急緩相扶け、互に提携して來たのであるが、往時を回顧して相互の關係に及ぶ時には、何だか懐かしいやうな慕はしいやうな舊友忘れ難き感がするものである。

序文
村上先生は眞に君子人である。今先生の「回顧」をよむ時には、なかく悪戯な江戸ツ子であつた様であるが、すでに道に歸してムつた時より、交際した我輩に取つては、温乎玉の如き人、諄々として説き、懇々として諭し、人をしめて悦服せしむる點に於ては、其文章も、説教も同様で、實に基督教界中得難き特殊の人物である。

世はさまざまと移り變りて、舊友四方に散亂せしも、一人先生は數十年一日の如く、神を信じ、道を守りて變ずる事なく、七十有餘の高齡に達しながら、須磨の勝地に一教會を新設して、孜孜として傳道に従事せらるゝと聞くに及んでは、猶更欽慕に堪へぬのである。

嗚呼。村上先生や、松山高吉、小川義綏、南小柿洲吾、稻垣信の諸先生の如きは、實に基督教界中の元老である。基督教界中のいはゆる維新の志士ともいふべき人である。之をして政界に在らしめたならば、今頃は世上より尊崇せらるゝ人となつてをるのであるに、靈界の諸君は、仁を求めて仁を得たり、こいふべきでもあるが、愛を説き、義を説き、報恩を喧ましくいふ基督教界の人人が、案外之等の諸君に對して忘恩の様であるのは如何のものにや。余は曩きに故奥野昌綱氏の窮をきいて、基督教界の無情を愠りしが、今や諸氏を想ふに方て、基督教の實行の微弱なるを悲しむのである。そは兎

序文
も角も、爰に村上先生の「回顧」に序するに當り、村上先生
が基督教の當初に方つて、斯界に貢献せられたる大感
化、大功績を追懐し、且つ吹聴し、以て聊か余が先生に對
する報恩の情を述ぶる機會を得たのを、無上の幸福と
感ずるのである。

大正元年八月一日

松村介石識

序

村上先生は我よりも十年の長者である。明治九年の
秋、我れ一大抱負を以て京都同志社にゆいたとき、先生
は既に神戸に在つて組合教會の指導者であつた。恰
も此頃兵庫教會の設立があつた。先生は推されてそ
の牧師となられた。先生はまた七一雜報といふ週間
新聞を發刊してその主筆となつて居られた。此新聞
は極めて平易の文にて書かれ、宗教問題を甚だ面白く
論じ、平信徒が多大の興味を以て讀み得るやう綴つた
のであるが、就中色々な面白き事柄が誌されて居つたか

序文

ら、神官僧侶も之を讀んでその説教の材料と爲した。時代も時代であつたが、別に比類なき雑誌であつた故に、讀者の好奇心を惹起した。ここに實に多大であつた。先生の文はあつさりとして、清水の庭園を流るゝやうで、當り障りがなく心持がよい。始めて村上先生の演説を聞いたのは、明治十一年の夏、恰も東京で基督教信徒大親睦會の開かれたときであつた。日本の沿岸にあつた海嘯の餘波がアメリカ太平洋沿岸まで達したといふ例を引いて、山川鳴動鼠一疋にあらずして、鼠一疋が山川を鳴動させるといふやうな面白い精神の感應を説かれたかの如く記憶する。

先生は私の請求を容れて群馬縣安中にも行いて下された。又私の請求を容れて讃岐の高松にも出張して下された。が、先生の清き感化は兵庫縣に最も著しい。先生は霸氣満々たる同志社青年傳道師の活動を喜び、之を奨励し、之を慰藉し、彼等の温和なる叔父となつて下さつた。此青年宗教家の先驅として又伴侶として、傳道した人が六名ばかりあつたが、先生は其一人である。而して今尙健在なるは最も祝すべきことである。先生は大道に大聲疾呼することなく、家より家に訪問して福音を傳へあるき、しかも煙ふれる麻をけさず、痛める葦を折ることなく、罪人の友となられた。幾多青

年傳道師共が氣任せに荒した傳道地を小言もいはず
 片付廻られた叔父の役目ばかりは永久記憶されねば
 ならぬ。高松ご姫路ごはその最も著しいものである。
 先生は外國宣教師を師として基督の福音を學びたる
 人であるが、彼等の厚意に對し、飽くまでその報恩の態
 度を失はれなかつたことは實に美事である。さりご
 て盲從にはあらず、自分の修養としては常に新知識を
 得るに怠りなく勤められた。神戸地方には最も美は
 しく年寄りたる二人の先輩がある。一人は二階堂圓
 造氏であるが、一人は村上先生である。先生今年六十
 七の春秋を迎へられたが、風光明媚なる須磨の山水を

友ごして須磨教會の牧師である。今日此先生が須磨
 の隱君子たるを知るもの多からざらんが、後世永く須
 磨の風月を訪れるものは、寧ろ此隱君子の風姿が自然
 の風光に劣らざるを偲ふであらう。先生の回顧は先
 生の筆に成りたるもの、毫も修飾なく有の儘心頭に浮
 び來るまゝを綴つたものである。此回顧を讀むもの
 は過去の基督教史を讀むのみならず、又永く須磨の聖
 者の風光に接するを得ん。我は一片の感想を誌して、
 先生の知己に報ゐんと欲する。

大正元年九月六日

東京 海老名 彈正

回顧

緒言

余は曾て余の信仰始末を上梓して、些か後進求道者の
乘りにもがなと思ひつゝも、事に紛れて遷延今日まで
等閑に打過ぎしが、偶たま餘暇を得て復び此事を思ひ
起し、遂に筆を執ることゝなりたり。而して其序を以
て余の記憶に存する、余が幼時よりの生涯の出来事を
も、試みに叙述したるに、頗る變化の多き生涯にして、余
の如く種々の境遇に遭遇せる人は世に稀れなるべく、

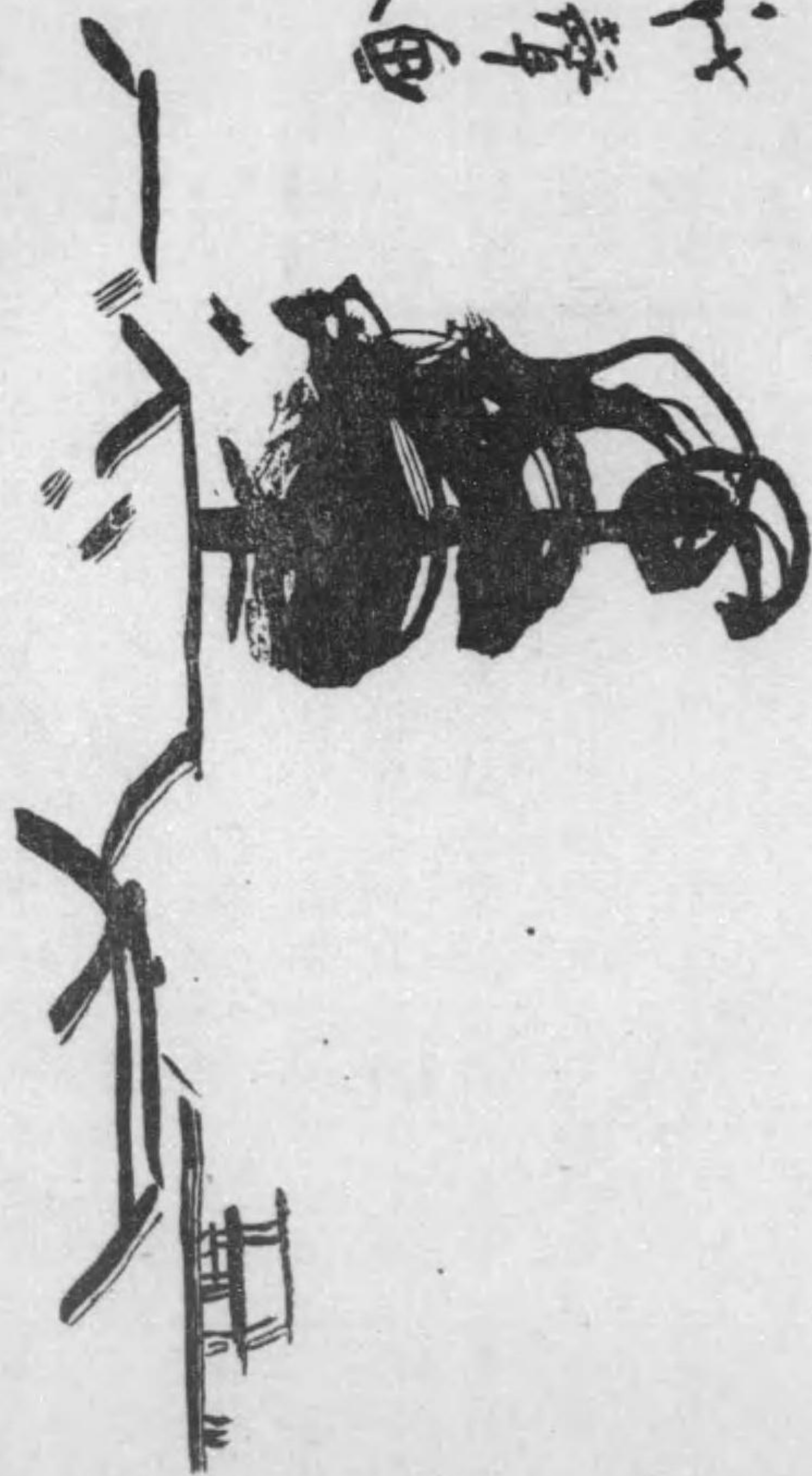
目次

霞ヶ關	………	二六
蝶螺尻	………	二六
小挽町柴田の塾	………	二八
城府の歸國	………	三〇
攝州三田	………	三三
東海道旅行	………	三三
狂言の遣り損じ	………	三四
九鬼侯の學業獎勵	………	三七
方向を轉じて武士と成る	………	三八
荒井兄と七年目の面會	………	四〇
洋學流行と境遇の小變	………	四三
三田藩の進歩	………	四六

京濱間

廢藩當時	………	四八
横濱の丸善	………	五二
太田町の小店	………	五五
飲酒放蕩の極點	………	五六
第一の悔改	………	五九
僕の爲の二天使	………	六一
神戸に於ける新生の僕	………	六四
志摩三商會	………	六四
神戸教會初參詣	………	六六
神戸教會創立當時	………	六八
僕の受洗	………	七〇
明治八年の神戸に於ける青年信徒	………	七三

下海圖



目次終

目次	明治七八年の兵庫縣下の傳道	七五
	明治七八年の神戸在留宣教師	七七
	神戸教會の發展と多聞兵庫二教會の萌芽	七九
	兵庫教會創立當時	八一
	明治十一年の高知傳道	八四
	安中巡遊傳道	八八
	大阪の福音社	九二
	兵庫教會會堂新築と自給獨立	九五
自評		九七

回顧

村上俊吉著

麻布六本木

榎の木と僕

東京麻布六本木市兵衛町の往來の南側に、大きな榎の木がある。此の榎の木は僕が子供の時分、果の成る時期には、毎朝のやうに拾ひに來た、眞に懐かしい樹である。周圍の家屋などは、昔時とは全く違つてしまつたが、此の榎の木ばかりは、依然として舊時の状態である。僕の生涯も此の榎の木の如くで、周圍の状態は時勢につれて變遷したが、只僕は過去現在を通して、依然として矢張僕である。未來に於ても同様進化發展の中に依然として矢張僕であることを信ずる者である。

麻布六本木 榎の木と僕

抑も此地は維新前には、舊小田原藩主大久保加賀守侯の中邸のあつた所で、其の榎の木は邸内東北の一隅、稻荷神社の境内に在つたのである。大久保侯は高十一萬三千石で、上屋敷が芝増上寺、大門前下屋敷が千駄ヶ谷、中屋敷が此の麻布六本木である。通用門を這入ると、西手に棟續きの士族長屋がある。首の家が岡田佐太夫といふ奥附の用人、其次が僕の父の家で、福地貸庵と申した。其隣が酒井田某、それから五六軒あつた。向側にも一棟六七軒あつて、其中には當時東京で名のある岡本秋輝といふ、書工の家もあつた。岡本の捨さんや、杉本の文さんは僕の親しき遊び友達であつた。僕の家は代々大久保家の醫師で、家祿二百石を拜領してをつた。僕が生れた頃には、父は大久保侯の祖母、清蓮院の侍醫として麻布の中邸に住んで居つた。大久保家の家法として、醫者は父が歿すると、其家祿の幾分を減じて、其子に随意外宅修業を許し、適當の時期に達すれば祿を

復して、歸邸を命ずるのである。父も青年の頃は、此藩則に従ひ、大傳馬町に外宅して、醫者をして居つたのである。父も青年の頃は、此藩則に従ひ、大傳馬外宅中に某家より妻を娶つて、其腹から長兄玄仲を擧げたが、不幸にして間もなく、妻に先き立たれ、歸邸の後更に後妻を娶つた。是れは日蔭町で、屈指の豪商、島清三郎といふ人の妹で、名を光子と呼んだ、これは即ち僕等の母であつて、此腹から謙次、禮介、鶴子、及び僕の四子が生れた。僕は其の末子である。父は漢學の素養のある人で、漢詩を善くし、且つ人物であつたこの事である。又今から思ふと、進取家であつたと見え、僕の三四歳の時、父から植ゑてもらつた、種痘の跡が、兩腕に今尙歴然と存してをる。僕は之れを父の紀念と念つてをる。又父母共存中の事で、今も尙僕の記憶に存してをる。一事は、一夜父は何れにてか、鹿肉を手に入れ、自ら煮て獨酌し、僕は母に抱かれて、其傍に居つた、鹿は藥だからといつて、一切れ食べさせられた事を記へてをる。

其頃は肉食を「モンジャー」と言つて、大概は之れを懼れ、且つ之れを食べると穢れると言つて、中々家の内なぞに持込んで食することは、爲ならぬ時代であるが、此の一事でも、餘程開けた人であつたと思はれる。一室内に於て、父母の顔貌を、同時に僕の眼眸に納めた此記憶は、始めにも終りにも、此一事のみである。其後母は重患に罹り、里にて療養中、終に歸らぬ旅につきたまふた。蓋し之れは僕の三歳の時であつた。附記、人の記憶力といふものは不思議なものである、之れより後の出来事で、記憶すべき筈の事柄にして、記憶せざるに引替へ、此一事は記憶してをる。父の顔は十歳頃までは記憶してをつたが、其後漸々消失して、今は全く忘却したのに、此一事は繪の如く其現象の概容を、記憶に存して居る。

清蓮院の奥殿

當時長兄玄仲は、青年のころではあるし、父の跡にならひ、大傳馬町で醫

を開業し、次兄謙次は儒家田口卯吉氏の門に入つて漢學を修め、父の家に居るのは禮介、鶴子及び僕の三人であつた。僕婢書生とも一家八人暮し家は餘り廣くないから賑かであつた。母の就眠後は、父が清蓮院の侍醫である縁故によつて、僕は過半奥殿に養育せられて居つた。清蓮院は六十餘の老嫗であるが、阿波侯から嫁し來られた方で、萬事有福とのことであつた。老女一人、中老一人、右筆一人、お側と稱する侍女五六人、是等は各人一藝を以て奉侍する者である。お次と稱する表女中五六名、お末と稱する下婢七八名、女中部屋としては長局もある。御廣敷と稱ふる藩士の詰所より奥へは、奥附の役人の外、八歳以上の男子は、一切出入を禁せられてある。お次の中に、波江といふ女中があつて、母の如くに僕を愛して呉れた。僕は其人を覚えて居らぬが、波江が僕を愛して、世話をして呉れたといふことは、中屋敷で誰知らぬ者はない程である。僕も之れを人から聞

いて知つてをるのである。彼の女は百人首を僕に教へて呉れて、僕が五歳の時始めから終りまで、之れを諳記したと言つて、彼女が毎も人に誇つたといふ話も聞いてをる。多分彼の女の性質の幾分乎が、僕の後天的性質に、吹込まれてをることゝ思はれる。

女中は皆絹布で、上官は打掛を纏ひ、椎茸髷と稱する頭は、當今の庇と違つて、兩横に廣がつてをる。僕は時々清蓮院の御前に出て、お慰み相手になつた。時としては親類の若殿が來られて、其のお相手になつたこともある、お相手になつたは善いが、庭の築山で鬼事をして、掴み合ひを始め、叱られたことを記憶してをる。又時折は當代の君侯が、芝から來られるので、此れにもお目通りをして、菓子なぞ賜はつたこともあつた。

斯やうな譯で、自宅での事は、餘り記憶して居らぬが、父は随分氣の短い方で、子供等が時折は、鐵拳をお見舞申さるゝ事がある。僕も一度時計

を毀して、鐵拳は免れたが、叱られた事を記へてをる。然し父は僕に望を囑して、蘇之吉僕の幼名は兄弟中で、優しな者になるであらうと言はれたさうで、之れは長兄から聞いたのであるが、根顔に堪へぬ次第である。父は就眠の際、長兄に遺言して、蘇之吉は必ず武士にして呉れと申されたさうである。此れは末子の事であるから、貴手さへあれば、誰にでも遣るかも知れぬと、按じての事と思はれる。果して此遺命は後に二回までも、僕を岐路より救つたのである。父の生存中にあつた、其他の記憶は、米船が浦賀に來た時、諸藩とも一時大騒ぎをして、何時立のきを命せられるかも知れぬといふので、夜中に起された事を子供心に記憶してをる。父の永眠は僕の六歳の時であつたが、此時は後妻として、吉田氏を娶つて居られた。父の病症は陰症の傷寒といふことで、長兄が枕邊に侍べり、白き薬を口に含ませ、父は之れを飲み了つたが、暫らくすると痰が上つてきて、其まゝ彼の世の人と

なりたまふた、其現狀は今も尙彷彿と記憶に存してをる。

寺院の生活

祈願所の住職

父の永眠後は、家庭の情態が忽ち一變した。此時謙次兄は既に田口の塾に在つて、獨立の生活をしてをつたが、繼母吉田氏は里に歸り、禮介兄は福山藩の醫師、三澤氏の書生となつて、本郷に行き、鶴子と僕の兩人は、幼少であるので、長兄の宅大傳馬町に、引取らるゝことゝなつた。行つてから間もなく、鶴子は瘡病を疾み、病後の日立悪しく、終に十歳で此世を去つたのである。

此時僕は六七歳であつたが、是れまでに末子の我儘一杯に暮した癖は尙去らず、今は兄の厄介になつてをる身であることも知らず、相變らずダ、を言つて、家人を困らしてゐた。一例を舉れば、或日長兄は人と約

して魚釣に行かうとしたれば、私も連れて往つてといふ、船で海に行くのであるから、子供は危ないと言つても聞き分けない、兄は據なく魚釣を止めて、猿若町の芝居行となつた。其時の演劇は、小和田小兵治とかいふ劇で、菊五郎の早變りなぞ、今に善く記憶してをる。先づ斯くの如くで、漸く二十歳を越えたか、越えぬ乎位の長兄の身に取つては、少しく持てあましたと見え、終に僕を寺院に預けることにしたのである。大久保侯の上屋敷は、芝増上寺大門通の濱手に在つたから、人之れを呼んで、濱の大久保と言つて居つたが、此邸内に祈願所と稱する小寺院があつた。寺號は記憶せぬが、此寺院の住職は頗る親切の人であつたので、長兄は此人に托して、兩親のない小兒であるから、暫らく預つて下さいと頼んだ。當所は不適當だから、知合の寺院の中へ、何れへか御周旋致しますから、先づお遣しなさい、との快諾を得たので、早速僕は此寺院に送られることゝなつた。



祈願所

寺院の生活 祈願所の住職

祈願所の住職の周旋で、最初は目黒の一寺院に連れられたが、其寺に居るのが否だと言つて聞かないので、據なく復芝へ連れて歸つた。後に住職は長兄に語つて、弱りましたナ。目黒の寺へ連れて行つて、置いて歸らうとした所が、何うしても一緒に歸らねばきかぬといふので、據なく復た連れて歸りましたが、何んと言つても目黒から芝まで子供の仕事であるから、直ぐ草臥れて歩くことが出来ない、其のうち日は暮れるし、二里もある所を脊負ふてかへりましたが、脊上でスヤ／＼と眠てゐるのですもの、彼のやうに困つたことは有りませなんだと、其時までも家庭の温もりの未だ醒めやらぬ六歳の童子、漸次に寒き境遇に入らんとして、まだ其自覺に入らなんだのであつた。

祈願所の住職は、一考の後、今度は大久保家の菩提所である、青山の教院といふ寺に、預けることゝしたが、今度は善く聞分けて、此寺に止まつた。此寺へは家中の士分が、絶えず墓参をするので、時折は知つた人の

顔を見ることが出来、彼等の中には僕を尋ねて、慰さめて呉れる人もあつた。一日大久保侯が先代の墓参として、此寺へ來られたことがあつた。僕が此寺に居ることを聞かれたと見え、其休憩所に僕を召し、僕を膝の上に抱きて曰まはく、必ず鎗を建て歩く者とならねばならぬぞとて、手づから菓子を賜はつた。是等のこともあるし、並の小僧取扱にも爲し難く、其割に頑是なき子供で、物の役には立たず、終に事に寄せて此寺からは断はられることゝなつたのである。

教學院に居る間は、一ヶ月半ばかりであつて、別に記憶に存してをる事も無いが、菓子の澤山な寺で、毎度々菓子を貰つたことを記憶してをる。又此寺から千駄ヶ谷の下屋敷までは、餘り遠くないので、時々遊に往つたが、或日藩の大調練を見に行つて、知つた人に多く遇つて、嬉しく思つたことを記憶してをる。

麻布の東福寺

次には麻布の廣尾方面にある、東福寺といふ隠居寺に遣れたのである。住僧は七十歳餘、加藤某といふ家宰と、十四五歳の小姓と、糸平といふ下男との五人暮しである。加藤といふ人は、其近邊に一家を構へ、自宅で息子が商業を營んでをるから、自分は隠居の身である。此人が僕を子の如く愛して、世話をして呉れた。遊戯の具を買ふて呉れたり、習字を教へて呉れたりしたので、僕は此時からいろはを習ひはじめた。住僧は農家の出で、學問は無いが、至極結構人で、毎日佛間の掃除と、廣き庭の掃除とが勤務である。居間の奥に十疊ばかりの一室があつて、此室に室一杯程の巨大なる黄金の佛像が安置せられてあつた。誰の寄附であるか、金光燦爛として、何も知らぬ其頃の僕の眼には、難有さうに見えた。當時本堂は焼失して、此が看經の場所となつて居つたから、毎朝此佛間に入つて看經をして、其れから朝食となるのである。其給仕

は小姓であるが、僕も其傍に坐して、手傳をするのである。お人善しの僧であるから少しも畏くない、惡戯をしても怒らない、外出の供は小姓と下僕であるが、行く先に依つては、僕も小附けに連れられたこともあ

る。此寺に居ること凡そ二年餘、加藤某の氣に入り、僕を其息子の養子に申受たいと懇望した。然し長兄は堅氣の人で、弟を寺へは預けてゐても、亡父の遺命には背かれぬと言つて、蘇之吉は武士にせよとの、亡父の遺言でありますからとて斷つた、加藤某は大いに失望して、其以後は僕を待すること、前日の如くでない、終に上野の一寺院に遣らるゝことゝなつた。

上野山内の一寺院

傳馬町の兄の方に、通知したか何うだか知らぬが、僕は東福寺から直ちに上野に送られた。何月頃であつたか、其寺は何といふ寺であつた

か記憶して居らぬが、其の寺院の内容は記憶に存してをる。住職の外に僧徒七八名家宰として會計萬端を司る者一人、此れは日々通勤する者である。其他に寺侍大小五六名、小姓一二人、十歳前後の小僧三四人、此小僧は僧を志願する者と、小姓になる者と、二途に分れてをるが、何れも貧家より來つて、養育せられてをる者である。

僕が此寺に送られたのは九歳の頃であつた。随分廣い寺で、優に大旗本の屋敷位はある。食事の時には廣やかな食堂に出で、僧俗二回に分つて喫食をするのである。小姓以上は俸給がある。小僧は筆墨書籍は勿論衣服に至るまで給與せられ、寺中の長者より讀書なぞの教育を受ることゝなつて居る。小僧の勤務は習字讀書と、住職の給仕をする位の事で、其他別に用事はない。平常僧房と侍部屋とは全く區劃せられ、起臥動靜全く關知せざる姿で、顔を見あふことは稀れである。然し一若僧に沙彌と呼ぶ者があつて、修業の爲毎日廣間へ別居して讀

經をしてをつた。其文句は今も耳底に存してをる。「ゴীগー、マヤウライ、ミーダーソン、カンノンチウ、ゴンチウ、」と節を附て讀むのである。彼は鈍才らしかつたが、至つて熱心さうに見えた。寒修業ださうだが、頭髮は五分月代で、毎朝未明から起床して冷水を浴び、新調の粗布の法衣を着して、上野山内の靈場を巡拜するのである。如何にも殊勝氣に見えて、慕はしく感じたから、僕も佛門に入らんと、心が起つた。住職に其事を申出た所が、彼は承諾して、一應實家に相談すると言つた。

小僧は僕共に四人、机を列べて日々讀書習字を勉めてゐたが、此時僕は大學を終へ、孝經を教しへられ、美しく讀書する者の一人であつた。其頃如何なる動機に由つたか、僕に天體の疑問が起つた。昔し朱子は小兒の時人に抱かれて、自から天を指さして、天の外何者ぞと申したさうであるが、僕は斯やうな話は少しも聞いて居らなかつたが、何からである

か、天の端は何んである乎との疑問が起つた。此が端だと言つても、其外に何かは無くて叶はぬ筈との疑問である。之れを住職に問ふたれば、彼は端座し手を膝の上に置いて、黙して暫らくして曰く、斯やうにすれば解ると、甚だ要領を得なかつたが、子供のことであるから、本當に左様かと思つて問返しも致さなんだ。

又當時一般僧侶の悪風として、男色を公許して居つたことは、此寺院の内容でも明かである、小姓なる者は即ち僧の男妾である。一日八九名の他寺の住職を招いて、饗宴を催ふしたことがあつた。其中の首席は權大僧正の名ある者であつて、其の膳には白紙が敷かれ、他僧と區別せられてあつた。之れは位階の故であらう。

宴酣なるに及んで首座の僧は僕の顔を熟視して、此の小僧は視なれぬ小僧であります、近頃参りました乎と問ふた。當寺の住職答へて、左様彼は僧を志ざす者でありますと言つたれば、彼の權大僧正殿微笑し

て、僧にするは惜しき者だと言つた。勿論戯言ではあるが、善意に解しても悪意に解しても、斯の如き席に於て主座僧の口から斯の如き言を吐くは、明らかに佛教の墮落を證するに足るものである。

其れよりも尙甚だしきは、何の機會であつたか、終に往つた事のない、僧房に往つたことがあつたが、偶然院代の部屋を覗いて見たらば、爐邊に一人の青年が、小本を讀んで居るのを見た。色の生白い瘦ぎすな、ベソリとした風體は、男とも附かず女とも附かず、一種の風體であつたから、子供心にも妙だと思つて、茶の間へ返つて寺侍に尋ねたれば、彼れは男色といふ者であると言つた。院代が私かに其室内に止宿せしめたものである。

又寺侍なる者は、小性から流れ來つた者と、別に雇はれた者であるが、長く一寺に辛抱する者は、御家人の株のやうなものを與へられて、一家を爲すに至ることである。彼等は僧侶ではないから、寺に居つて

も肉食を欲するが、公然食することが出来ぬから、夜間人の入寝した頃、茶の間の爐邊に集つて、密々飲食するのである。蝸を天蓋蛤を栗と言つたやうな符牒を附けて、寺院の法網を潜つてをる。現今は僧侶の肉食妻帯は自由となり、上野は變じて公園となつたから、右に述べるが如きは昔時の一夢談に過ぎぬが、當今の寺院内部に於て、果して革進の實が行はれつゝあるや、聞かまほしき事である。

町内の生活

傳馬町三丁目

僕は僧に成ることを許されるであらうか、何うだらうかと、思つて居る所へ、突然傳馬町から迎へが參つた。而して其寺の家宰から、自宅に歸へるやうに言ひ渡された。僕が東福寺に居た時には、三兄が交互尋ねて來て呉れたが、上野へ來てからは、絶えて尋ねて來る者もなくなつた。

から、僕は最う再び家に歸へることの出来ぬもの、家の無い者と思つてゐたのであつたが、此知らせを聞いて半ば夢かと思はかり嬉しかつた。早速仕度をして傳馬町から迎へに來た、家僕に連れられて歸つた。歸つて見れば所は矢張大傳馬町三丁目であるが、以前とは家が違つてあつた。

此時長兄は既に妻を娶つて、醫者として幾何の病家もあつた。長兄の妻は名を高と呼んで、大岡越前守侯の家老、小林文助の長女で、伶俐な心立の善い人であつた。福地に嫁してから、僕が寺院に預けてあることを聞いて、左様な所に置くのは宜しくないから、早速呼戻すが善からうと言つたので、長兄は終に僕を呼戻すことにしたのである。當時長兄夫婦に未だ子はなし、歸宅早々は可愛がられて、諸方へ連れて往つてもらつた。姉の里小林に泊りに行く、其家にも久吉といふ同年の子が有つて、文助翁に連れられて、神明前に遊びに往つて、繪本なぞ

を買つて貰つた。又本郷の三澤に行つたら、此時禮介兄は順民と改名して、三澤の養子となつて居て、一緒に淺草に連れて往つてもらつた。斯やうに久しぶりで、俗家の子弟の生活に歸つたから、是に境遇は一變して、東京の心粹である傳馬町子となつたのである。

長兄の家は小傳馬町との界の所で、隣が軸屋、其隣が紙屋、其隣が魚屋、向側は綿屋に指物屋に、下田屋、横町は大丸の番頭、妾宅、醫者、三味線の師匠、といふ軒續きである。此邊の人の頭には武士といふものは無い。殿様のやうに思つてゐるのは地主と大問屋、畏い者は家主、勇ましひ者との理想は、仕事師と稱する消防夫、毎日喧ましひのは周圍八方でペンベント鳴る、三味線と俗歌の稽古である。

僕が傳馬町に歸つたのは、九歳の冬であつたが、其時から三年計り此に居つたであらう。當時の習慣として、餘り教育を重せなつたので、別に師匠も取らず、兄から論語の素讀をしてもらふのと、兄の手本を習ふ位

ゐのことであつた。二階の一室に閉籠つて別に學友はなし、猫を相手にしたり、人の顔を繪にかいたりして遊んでゐたが、其頃雨は何うして降るものかとの疑が起つたので、誰彼に尋ねてゐたら、誰であつたか其れは大きな龍があつて、夜間人の寢静まつてをる時分に、川や海から水を天に吸上げて、天から之れを撒散らすのであると、教へて呉れたが、當時僕は其答へで、満足してゐたのである。蓋し中らずと雖も遠からずではあるが、然し若しも此時代から現今のやうな教育が開けてゐたならば、善かつたであらうが、哀しいことには、夜明け前の時期であつたのと、今一つは弟の身分で、其中に祿之助といふ男子が生れ、次に金といふ女子が生れ、僕も一つ二つと年を取るに従つて、兄の臍嚙りといふ感念が興へられ、子守りや薬切りや使走りなぞで、浮々と月日を送つてゐたのである。

其中不圖とした事から醫者になつては何うだ、醫者になれば故大人の

跡を踐むわけで、武士になるも同様だとの説が出て賛成者もあり、遂に髪をおろして坊主になつたのである。(但し維新前は關西の醫者は總髮關東の醫者は圓顛であつた)。
其少し前の事であつたが、前に福地の家僕であつた梅吉といふ男が、後に猿若町の俳優某の下僕となつて、主人の供をして傳馬町を通行した事があつた。其時僕は戸外に遊んで居つて梅吉に遇つた、然し其俳優には心附かずに居たが、其後梅吉は兄の許に来て、主人が弟子様を申受度いやうに申しますが、如何でしょうと申込んだ。僕は之れを聞いて、兄の臍嚙りをしてをるよりも、寧ろ俳優にならうかしら、俳優は随分面白さうだと思つたが、兄は亡父の遺命を守つて許さなかつた。之れに依つて觀れば、父の遺命は多分僧になる事も許さなかつたであらう。當時假りに醫者に成らうとしたが、之れも成功の方針ではなかつたのである。

藩邸の生活

濱の大久保邸内。

烏兎早々僕の十三歳の時、傳馬町の家は火災の爲に焼失したので、長兄一家は暫時西久保の、分家の大久保邸内に假居してゐたが、其後家祿を元高に復され、長兄は芝の上屋敷詰を命せられたので、僕等も随伴して芝の本藩邸内に移住したのである。
是れよりは屋敷者となつたので、傳馬町とは境遇全く一變である。北隣は志谷佐太夫といふ年寄役、南隣は田城板倉等の士族朋友として、志谷の勝田城の常板倉の元小川の量其他數名を得、此に始めて小山歸一といふ師家に通學を始めたのである。此人は文武兩道に達し、兵法にも通じ、藩の軍師であるが、書と弓術の二門を以て多くの門弟を得、他藩から來學する者も多くあつた。

藩邸の生活 濱の大久保邸内

時に當時の君公は、前年僕が寵を得た方とは、代が替つてをつたが、毎年一回ある漢書の御前試験の時などは、僕も一二回出て、紙筆目録など賞與された事がある。儒者は樋口といふ人で、此方では文選の素讀が濟と、十八史略を讀み始めたが、小山の方では習字の傍に、孟子の講釋を聞いてをつた。又大門通に橘といふ醫者の大家があつて、一六には傷寒論の輪講があるので、其家の息子の宗益といふ學友に誘はれ、解らぬながら折出席したこともある。然し僕は元來武藝が好きで、朋友が日々撃劍柔術馬術などの稽古をするのを見て、羨やましく思ひ、度々長兄に學び度いと願つたが、醫者になる者は武藝などは爲ない方が宜敷からうと言つて許されなかつた。傳馬町に居つた時には紙屋の孫一魚屋の兵吉などと交つて、何時しか町子化して居たが、根が屋敷者であるから、藩に歸れば藩中の子弟と區別はない。藩のうへから言へば、各藩其藩風を異にして居つたが、概して士族の子

弟と町家の子弟とは、氣象から遊戯までが違つて居つたのである。當時武士たる者は、五歳から兩刀を帶ることになつて居つたから、子供でも外出する時には、兩刀を挾むのである。兩刀に對する武士魂とでも言ふ乎、又は昔時藩々の先祖が敵味方であつた餘弊とでも言ふか、藩々の子供同志が道で出會ふ時は、互に睨みあふ氣味があつた。相手が弱さうに見ゆれば、嘲弄ても見るし、時としては喧嘩もする。其喧嘩の一つは、風絡争である。僕は外櫻田の大岡侯の屋敷で、度々風の絡争を見たことがある。此屋敷は街衢の角で、隣屋敷と風の絡争に、持つて來いといふ場所であるから、風喧嘩が中々盛んである。始めは十二三歳の子供が遣つてをるが、時としては二十歳前後の青年が番歸りなぞに立寄つて、手を出すから中々はづむのである。之れに用ふる風は大抵二枚と稱する、西内紙二枚だけの大きな物で、之れに太い麻糸を結附けて、糸目の所に俗に雁木と名づくる刃物を含んだものを附

け、風に靡かして之れを飛ぶ。糸を緩めて風を放てば、風はぐる／＼と廻つて下つてゆく、之れを水を汲むと申す、糸を手繰れば左右にかしがすに、真直に上つてくる。一方から水出羽ヤイ／＼といふと、一方から大岡ヤイ／＼といふ。其れから絡争が始まるのであるが、糸の操縦甚だ巧みで自在に操つり、勝利者は一日に十數枚を捕獲するのである。是等も武士として勝敗を争ふの一遊戯であるのだらう。

霞ヶ關

蝶螺尻

僕の十五歳の時、三田藩村上垣庵といふ人の養子に行つては何うだ、といふ話が出た。芝の屋敷に小岩彌助といふ人が有つて、其姉が恒庵の妻であるので、此小岩に由つて談判が運ばれ、終に貫はれる事になつた。折角小山で學問を始めたのに、之れを止めるのは惜いと思つたが、當時

の習慣で弟は必ず他家へ養子に行く者と、極つてをつたから、先方は厄介もなく、夫婦のみだといふので、賛成者も多く親戚も一致し、此に約束が纏つたのである。

攝州三田藩は、九鬼長門守侯で、高三萬六千石、村上は代々の藩醫で、家祿八十石を賜つてをつた。東京の九鬼邸は霞ヶ關にあつて、當時有名の安藝、黒田、兩邸の脊後にあつた。其中屋敷は本邸より二三丁を隔て、蝶螺尻と稱する谷合のやうな所であるが、村上は其中邸に住んで居つた。全邸七八戸、小田原藩とは違ひ、家中の青年は俗謠もうたへば拳も打ち、三絃も自由といふ風で、同じく藩邸とはいふものゝ、藩々其藩風を異にしてをる事が之れに由つて分る。稀れには例外の美藩もあるが、概して二三萬石以下の小藩の城府は、江戸子化して遊惰の風が行はれ、大藩に至つては、其本國の國風に支配せられて居るやうであつた。偕當時は年が十五歳になれば、成人の部に數へられた者であるから、煙

草も呑み習ひ、小使錢も持ち、廣間勤をするやうになれば、小獨立である。是等青年中武藝は素より武士の職分であるから怠ることは出来ぬが、學問に志す者は十分の一にも足らぬ程である。僕は醫者に成るのが目的であるから、其方針に向つて進まねばならぬが、修業に出るのには少し年が若か過るといつて、暫く養家に居つたが、矢張遊んで居つても、出た方が善からうといふことになつた。

小挽町柴田の塾

養父は芝田芸庵といふ、御殿醫の塾に居つた人であるが、當時は隠居醫の如く、蝾螺尻に引込で、茶の湯俳諧などを樂しみとして居つた。然し師家の同姓、柴田芳庵といふ小兒家が、小挽町にあるので、暫時此塾に行くことになつた。柴田は可なりの流行家で、四枚形の長棒に乗る醫者である。玄關には若黨一人、塾部屋には醫學生三四人、男部屋には六尺と稱する輿夫五六人、僕は此内に書生となつたので、境遇は茲に一變し

たのである。

最初の稽古が藥の調合と包み方で、餘り醫書の研究會といふやうな事は無つた。多くは實地見聞の稽古である。餘暇には先生家傳來の醫書を寫したり、學生各自に素問、金匱傷寒論等を、註解に由て學んだり、或ひは儒家に通つて漢書を學んだり、又は他の醫會に出席して、醫書の講義を聴く等の事であつた。

僕の十六歳の時であつたが、隣屋敷板倉邸の藩士から、小兒が急病だから、お弟子方の中、至急來て頂き度いと言つて來た。折悪しく他の塾生は皆外出して居らなかつたので、先生から僕に代診として、行くやうに命せられた。實に危険の事であるが、之れに依つても當時の醫家の情態を知ることが出来る。尤も僕は老成てゐて、十六歳の歳に三十と見られた位であるから、保たものであるが、十六歳の青書生の代診とは、先方も嘸かし不確に思つたことであらう。然し僕は落付拂つて、一二歳の

小兒の石のやうに固く脹れてをる腹部を診察して、歸つて先生に其容體を告げ、藥を盛つたが抑も之れは僕に取つて初めての経験であつて、亦終の経験となつた。

塾生の中には長崎の人で、蘭文を筆耕して學資を得てをる人があつた、又若黨から醫學生になつた者もあつた。其人の名は忘れたが、中々の奮發家で、遂に先生家に不満を懷いて出奔したが、彼は師家に恩誼ある身で、公然去り兼ねたからであらう。其前夜蕎麥を饗應はれ、僕も其御馳走になつた一人であつた。

城府の歸國

僕が柴田の塾に居つたのは六七ヶ月であつたが、俄然幕府の命に依つて、諸藩は其城府を歸國せしむることゝなつた。これは一大改革である。三百年來世襲して住み慣れた、東京を離るゝのであるから、城府詰の者に取つては大なる苦痛である。去りて主命もだし難く、各藩歸

國に着手したが、早き藩もあれば遅き藩もある。三田藩の如きは最も早き方であつた。

時は文久元年僕が十六歳の冬であつた、柴田を退塾し實家の親族に離れ、慕はしき東京を後にして、攝州三田に行くことになつたのである。其頃福地は尙芝に在つて、子女四人を擧げ、家計も稍豊かであつた。謙次兄は嘗て青雲の志を懷き、公義人となる爲に荒井姓を襲ひ、其長女と婚して牛込に住し、順民兄は既に醫師として養父と共に本郷に住み、相應に流行して居つた。當時東海道には二大關門もあり、交通不便の時代であるから、復び遇ふことは期し難きの想ひである。出發の一兩日前順民兄が暇乞に來た。彼は僕を誘ひ、留別の一酌を催したき考であつたが、出發前の事とて取込んでもゐたし、且や養子の身分として養家への氣兼ねもあり、心ならずも其場で別れを告げ、兄は門前に出て、後を振り返り、名残惜げに立去つた。之れぞ今世に於ける永別なりしとは、

攝州三田 東海道旅行
後年に至つて知られたのである。

攝州三田

東海道旅行

東京を出發したのは、文久元年の十二月中旬であつたが、同じ蝶螺尻の中邸に住む藩士四家族と、僕の一家と合せて五家族が組合となつて、之れに宰領一人、仲間二人、附添ひ、僕の一家は養母の爲に通し駕籠一挺を備へ、養父と僕は飛乗りと致した。
東京の外に見た事のない僕は、時折波の靜かな品川海を見る位で、山といふ山らしいものは、見たことが無いから、大磯に着した時、始めて巍然と聳ゆる箱根の山嶺を見て愕いた。成程山といふものは、斯ういふものである乎と思つた。其翌日は兼て聞及んだ箱根八里の峠を越へ、關所を通る時には、前帶して綿帽子を頂いた老嫗が、婦人の駕籠を一々調

べて乗合の有無と其婦人たることを報告するのである。警護の役人は左迄多くはないが、天下の關門のところで、威力があるやうに見えた。
當時東海道は中々賑つてゐたから、途中はチラバラ田舎道を通行するやうでも、夕方宿に着く頃には、旅客が落合つて、大小の旅館は何れも大繁昌である。草臥れた足の草鞋を脱いで、其れから湯に入つて、膳に向つた心持は別格の味合がある。
東京を出てから始めの兩三日までは、毎日宿に着くと、晝間に留つた風景を詩に作らうといふ考で、詩作の書物などを引出して、文字を列べて見たが、三日目位から中々其れ所ではない、日中の草臥で、夕方宿に着て、食事が済めば直ぐに寝てしまふのである。同行中でも僕より少し年上の青年輩は、人の寢靜まる頃から、飯盛と稱する者を招いて、散財も爲た容子であつたが、僕は年も若かく、父母と其にある身で、此誘ひは受けなかつた。

只日々新しき風景に接し、名物を食ひ、大井川で雲助の肩車にも乗つたし、富士川を渡る時には竿竹が弓のやうになつたのを覚えてをる。而して漸々上方に近づくに従つて、里人の言語や婦女子の髪形までが異つて来て、見る物觸る物が珍らしいから、足の痛くない時には、今の氣車以上の快樂を感じたやうに覚えてをる。

狂言の遣り損じ

三田に着したのは文久二年一月元日であつた。僕等一家は同藩の深見元恭といふ人の家に寄寓することゝなつた。深見は藩醫で家も廣く財政も豊かである。此家に居寓する間は四五ヶ月であつたが、其間に僕は一の狂言を遣つたのである。

其次第は東京出發以來故郷を思ふの念は、兎角失せやらぬうへに、三田に来て見れば、思たよりも山間の僻地で、西を向ても東を向ても知らぬ顔ばかりではあり、益々東京を慕ふ心が募つて、寧ろ脱走して歸らうか、

獨立して何とか行けぬとはあるまいといふ妄想に驅られ、之が遂に事實となつて、竊に養父の金三兩を持出して三田を出發したのである。

三田から大阪までは八里の道程である。大阪には僕の伯母の養子、石原藏之助といふ人が、小田原の藏屋敷詰をしてをると、兼て聞いてゐたので、先づ此家を目的に大阪まで行つて、其れから東京へ行かうといふ考へであつた。

其時僕は數へ年の十七で、脚とても丈夫ではない。山越えの坂道をとぼ／＼と出は出たものゝ、小濱あたりから草臥れ始めた。幸ひに三田の商人で、大阪に通ふ男が、僕の風體を見て氣の毒に思つた乎、道連れになつて親切に世話をして、大阪まで連れて行つて呉れた。其日は最う暮れてしまつたので、其男の宿る旅館に一泊し、翌日其男の案内で堂島にある、小田原の藏屋敷を尋ねた。僕の尋ねて行つたのを、不思議に思つたであらうが、何しろ珍らしい客

人の事であるから、座敷に通して鄭重に饗して呉れた。當時大阪の藏屋敷へ留守居として詰て居る者は、中々贅澤なもので、僕婢も多く、ドンとした調子である。主人は四十前後、物堅い武士風の人であつたが、然し境遇が境遇であるから、子供上りの僕に酒も出るし、種々と馳走をして呉れた。主人は僕が三田に行きたて早々から、獨りで東京に行くといふのを、不思議に思つたか、先づ暫らく逗留なさいと言つて、種々機嫌を取つて呉れたので、終に三四日逗留することゝなつた。其三日目の事であつた、懇意の醫者に頼んで置いたから、明日は船で櫻の宮へ、一緒に見物に往つて、おいでなさいと言はれたので、楽しんでをつたれば、其夜三田から人が參つた。谷口といふ同藩の士族である。三田の方では彼の商人の通信によつて、僕が大阪の石原に居ることを知つて、迎ひに人を出したのである。谷口は養父よりの來意を述べて、歸つても何も言はぬから、是非連れて返つて呉れどのお頼みでありま

すからと、否應なしに復び三田に連れかへられたのであつた。

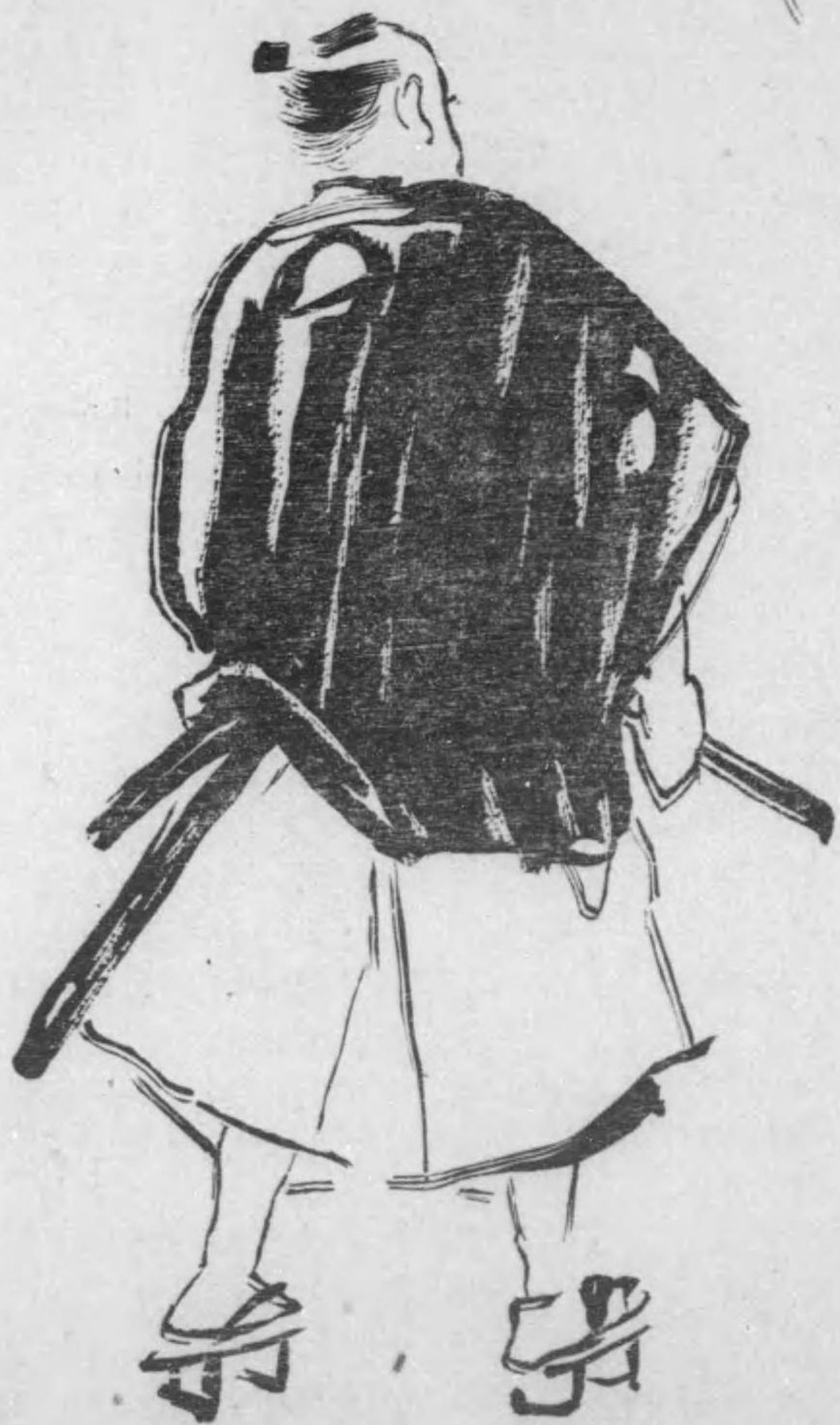
九鬼侯の學業獎勵

其後養父は、三田の天神といふ所に、一小邸を拜領し、其所に僕等も住むこととなつた。而して造士館といふ學校に、出席し始めてから學友も出來、漸次東京を慕ふの念慮も薄らいで來た。當時の君侯は九鬼隆義と申して、綾部の九鬼家から乗込まれた方であるが、田邊の三上新左衛門、綾部の近藤東作なぞいふ、道學家を師として、願ふる道學に熱心であつたので、三田に見えてからも、大いに斯學を獎勵し、殿中の大廣間を寄宿所に當て、藩中の學業に志ある子弟の入塾を許し、學資として一人扶持づゝを、給與せられたのである。當初入塾を志願した者は十二三名、僕も其中の一人であつた。儒官は白洲退藏といふ有力の人であつたが、君侯の信用を得、藩政に關與して居つたので、教務の方に従事する事が出來なんだ。他に學頭は在つたが、其人も勤

務のある身で塾中に教鞭を執る人が居らなかつたから、些か士氣養生、
學業獎勵の益は有つたかも知れないが、望んだ程學問は出來ず却て飲
酒の稽古が出來たくらゐることであつた。

方向を轉じて武士と成る。

僕は一旦寄宿所へ入塾したが、元來醫者になる目的であるから、十九歳
の冬に至つて、養父とも相談のうへ、醫學に従事することに決し、木村強
齋といふ醫師を介して、大阪の緒方洪庵先生に入塾を申込だれば、早速
承諾の報知を得たので、直に藩に出願して、其許可をも受け、準備次第上
阪の積であつた。然るに其少し前から、養父は病の爲に臥床し、始は格
別の事でも無さそうであつたが、サー往かうといふ間際から段々病氣
が重くなつて、手を離すことが出來ない。晝夜只管看病に従事してゐ
たが、終に其甲斐なく十二月廿九日に長逝したまふたのである。
明れば元治元年養父の喪を終へ、豫定の如く大阪へ行く積であるが、先



秋聲画

づ家督相續の件を濟さねばならぬと思つてをる所へ、君侯よりの内命として武士に成つては何う乎との事であつた。既に大阪に修業に行くまでにはなつて居つたが、君侯の命ではあるし、且當時にあつては武士に成るのは名譽のことであるから、直に其内命に従つて武士となることに決したのである。

其時までは名を俊庵と言つたが、之れも君侯の注意で庵を吉と改め、表席三番組へ番入したのである。其れ袴よ上下よ、必用物を調製すると同時に、弓、馬、鎗、劔の稽古も始めねばならぬ。僕は十二三の時までは、武藝が好きであつたが、今は既に遅掛の稽古となり、且劔は一人の敵なりといふ見識も出来てゐたので、矢張青表紙組として立つて居つた。然し當時の勤務とも言ふべきは、洋式操練の稽古と、年に二三回神崎の保塞に、交替出張する位の事であつたが、丁度其頃は幕府の長州征伐時代で、前髪を横にたらし、頬の邊りまで垂らし、筒袖細袴といふ服装の

隊長連が、馬上肅々と日々通行したのを記へてをる。

荒井兄と七年目の面會

東京出發以來、打絶えて消息を聽かなんた荒井兄が、突然三田の居寓に、尋ねて来て呉れた。久しぶりの對面、双方の歡喜は譬ふるに物なしである。當時彼は幕府の手に屬し、長州征伐の爲出軍して、大阪に屯して居る身であるが、一兩日の餘暇を得て、來訪を企てたのである。僕が武士になつたと聞いて、大いに喜こんで、即坐に一詩を賦して呉れた。

濶袴大刀改舊容

詩書脩徳武攘兇

君恩可報家須起

志業欲高六甲峰

翌日隣家の竹内翁を伴ひ、俱に有馬迄送つて、三人で小宴を開き、馬山の松茸に舌鼓を鳴らし、鼓ヶ澤の清流に耳を洗ひ、談笑數刻、薄暮に及んで別を告げ、彼は有馬に一泊し、僕等は三田に歸つたが、其後僕は神崎出張中、二回までも同兄を大阪に尋ねたのである。其れに就て少し恥かし

い話であるが、一の失策談がある、僕の舊時の状態を畫く爲に書して置かう。

神崎出張中僕は一日の暇を乞ふて、大阪道頓堀に旅寓する、荒井兄を訪ふた。彼は質商の奥坐敷を、居寓としてをつたが、兩人其室内で對酌し、種々の物語をしてをる所へ、兄の同僚が尋ねて參つて、此に三人の小宴となつた。酔の廻るに従ひ、此家では面白くないから、何所かで飲直さうといふ、飲酒家の極文句で、其家を出で近邊の酒樓に登つた。藝妓も來る、酒瓶も數回かはる。然し神崎までは二里もあると、兄に促されて、成程と心づき辭して去らうとしたとき、客は朝顔形の杯洗を取つて、先づ自から傾けて後僕に差した、彼は頗ぶる大酒家なのである。當時は豪飲を以て豪傑の如く、誤想して居つた時代であるから、僕も負けぬ氣になつて、其大盃を受けて飲み干し、辭して門前に出た時は、既にチラチラ燈火が點つてをつた。

瓢々浪々、新齋橋筋を歩み來る途中で、陳羽織を着た三人の武士の真中に衝突して咎められたことを知つてをるが、其後の事は何も知らなかつた。不圖眼が醒て視ると、商家の店頭に横臥してをるのである。綺麗に拭き取つてはあつたが、嘔吐の世話にもなつたらしひ。僕は驚愕して此は何所で、何故此に居るのである乎と問ふたれば、此所は順慶町でありませんが、貴下が此所へ來ませし時は、甚く御酩酊で、終に此店へ臥てお了ひなされたのであります。時は夜の十二時過であつた。幸ひ此店の善き人々と、通行人中の親切な人々の世話になり、駕籠を雇ふてもらふて、其夜未明に神崎に着することを得、同僚が取繕ふて届けを出して呉れて、其れで濟んだが、時勢の變遷に際し、一般青年間に酒量の増加してをるのを、此一事でも徴すべきである。

加之當時は天誅方と稱する勇士を真似るの風一般に行はれ、身の丈よりも長き大刀を横たへ、晴天にも高下駄を穿ち、手に鐵鞭を提げて、市中

を濶歩するのである。終には老人にまでも此流行が感染し、三都の如きへ他出する時は、襦高、鐵鞭、木履の三者は、武士を裝ふ必需のものこそせられて居つたやうであつた。

偕また僕が荒井兄と面會したのは、此大醉が最後となつたのである。其後同僚は徳川家の小吏として奉使中策を献じたる功に依つて、慶喜公より謁を賜はり、且短刀を拜領したこの事である。維新後は少解部に任せられたが、横濱に西洋人の疑獄があつて、之れに出張中何乎大いに憤慨する處があつて、精神に異状を來たしたものか、歸京の途次生麥の茶店の奥坐敷に於て自刎したのである。官之れを憐れみ、祭祀料百圓を賜はり、親族同僚に由て葬られたが、誠に残念なことであつた。僕は遠方の事とて、二三年の後に此事を知つたのである。

洋學流行と境遇の小變

明治の初年頃より、既に洋學流行の端が開かれ、關西に於ては三田の如

きは、其最たるものであつた。其の一因は當時蘭學者として名を知られたる、川本洪民氏の男、川本清次郎氏が世亂を避けて、三田へ来て居つたからである。此人は蘭學から英學に入つた人で、固より變則であるが、是れ程の洋學者は其頃日本に於ては指を屈して數へる程であつたから、斯る洋學者の來三を幸とし、家中の青年は勿論、他所からも來學する者が多くあつたのである。

君侯も亦大に西洋主義に傾き、一旦獎勵したる道學の如きは、稍舊色を佩るに至つて、寄宿所の如きも何時しか廢滅に歸して了つた。然し乍ら僕等は所謂頑固黨の方で、輕薄なる時勢に憤慨し、別に桃源社なる者を組織し、十數名相團結して、天神社内一字を構へ、舊城を固守せんとしたのであるが、之れは眞に愚なことで、進取の好機を逸したのである。若しも此際僕が陽明學か、朱子學を學んで居つたならば、時勢の潮流に乗じて進んだであらうが、狹隘固陋の聞ある、朱子學中の道學に熱中

して居つた爲に、先見の明を失つたのである。

君侯より屢々説諭を承けたが、一旦凝り固つた心は容易に解くべきでない。其れかあらぬか明治二年の十一月、地方掛を命せられた、是れは僕の廿三歳の時である。此に境遇少變し、以來は屬官を從へて村落を巡廻し、庄屋殿とも交はり、農家の事情をも學ばねばならぬ事となつた。三田領内に於ては、郷を東西南北の四つに分つてあつたが、僕の受持は東郷であつた。其頃より各郷とも、各所に二三ヶ村組合の學校を設置し、村内の子弟を此校に集めて、教育することが始められてあつた。之れが校長たる者は受持の役人、即ち僕等の如き者であるが、平常の教授は村内の神官僧侶、若しくは文字力ある者に托したのである。小學の内編外編、世界國畫の如きは、教科書の重なる者であつた。實に此企圖は尋で起るべき、小學校の萌芽であつたのである。

三田藩は藩として、普通の小藩たるに過ぎなかつたが、藩主九鬼隆義子は華族中の俊才であつて、且人才登用の明があつた。其第一着として、白洲退藏氏を用ひて、藩政に參與せしめたるが如きは、當時に在つては西洋の文明を一藩に施行するの魁となり、後來に於ては九鬼家を以て富裕ならしむる基礎となつたのである。

白洲氏は三田藩の儒家に生れ、聖堂に業を修めた人であるが、頗る先見の明があつて、善く時勢を洞察し、諸藩に先立つて藩政の改革に着手し、頑固なる宿老を説伏せて、自在に其意見を藩政に實行したるなぞの手腕は、中々鋭敏であつた。而して西洋の文明を輸入することを勉め、中村敬宇、福澤諭吉、兩大家の翻譯書を始めとし、日々新刊する、諸の翻譯書を藩士に紹介して、之れが閲讀を勧め、管に其學說を喜ぶのみならず、衣服器具に至るまで、一に西洋風を模擬するに至らしめたのである。

然れば明治二年の頃より、藩中一般男子の服装を洋服に改め、斷髮を許し、椅子よ、テーブルよ、パンを焼く法は如何に、牛肉を食はねば智慧が出ぬなぞと、中々に西洋風を氣取つた丈あつて、洋式操練なぞは、最も進歩してをつたやうであつた。其實例としては、藩の兵隊が京都に出張中、二條の廣場で諸藩の洋式操練のあつた時なぞ、各自スナイドル銃を携へ、一様に恰好した戎服を着て居つた隊は、三田藩のみで、一際目立つて見えた程であつたが、後れた藩は陣羽織采配といふ服装の隊長もあつた。斯くの如くで餘り進み過ぎた爲に、明治三年の十二月藩政が大政官に歸した時には、斷髮では大政の法令に抵觸するといつて、參事連中始め、慈姑の取手やうの頭を再造したやうな次第であつた。

又奉還の事も、諸藩に先立つて居た様である。一般に奉還の行はるゝ、其兩三年前に、三田藩は五ヶ年の家祿を以て歸田するの法案を決議し、白洲氏外二名上京して、岩倉大臣に謁を乞ひ、其願意を陳述して、一旦

願濟となつて居つたが、明治四年全國一般に奉還が行はるゝやうに成つたので、三田藩のみ別取扱にすることは、出来なくなつたと見え、五年歸田の方法は自然消滅に歸したのである。

廢藩當時

當時三田藩は慶應義塾の福澤氏を信用し、其説を容るゝの傾きとなつて居つたが、福澤氏は頗ぶる米國最負で、官吏を罵倒し、商業は人間の取るべき、自由の生活法であるを奨励したので、終に之れが三田藩の興望となつて、一人も官途を求むる者なく、皆歸商を志ざしたのであるが、其七分は失敗に了つたのである。之れは却つて其人の眞價を定むるの勝負を、早からしむる事となつたかも知れぬが、一藩を指導する上からは、少しく輕躁に過ぎたかとも思はれる。白洲氏も明治四年に松山の大家事に召されたが、辭して出でず。多々民間に在つて舊主を補佐して居つた。晩年になつてから、岐阜縣の書記官となり、其後第一銀行の

頭取となつたが、此際は氏の老年の時期であるから、幾許もなくして長逝したのである。

借また僕に於ては、漸々西洋の文明が輸入せらるゝにつれ、頑固の本城も搖ぎを來たし、固く信じて居つた孔孟の教も、左まで頼みとするに足らずとの感じが生じて、徐々に英學でも始めやうかと心附たが、時は既に遅かつた。廢藩となり、奉還が始まりかゝつた時で、僕も何と乎前途の方法を定めねばならぬ身となつた。

斯くの如くで、僕は精神上肉體上の兩方面に動搖を來したのである。既に漢學の信據を失つたから、更に洋學に進んで、其缺陷を補ふべきであるに、今は一家の生計を立てる爲に、未經驗なる新生活に入らねばならぬことゝなつた。少しのことで、一二年の後には、三田に基督教も傳つたが、此時には更に是等の音も無つた。外來の指導の光とでもいふべきものは、福澤派の商業主義のみであつた。

明治五年の二月、僕は神戸からゴールデンエーチ號に乗つて、久振で東京へ出向た。是れは一には親族の訪問と、二には生活を求むる爲なので、此際慶應義塾在學の九鬼隆一氏を訪問して、其紹介を得て、始めて福澤先生に面會した。其時は來客と、丁稚の衣服を洋服にするの可否に付て談じて居られた。東京に居るうち二三回尋ねたが、夫人も温順な婦人らしい、親切に客を待らはるゝ人であつた。僕は一ヶ月半程東京に滞在して歸國したが、其年の四月福澤氏も亦有馬温泉を掛けて、三田へ來られた。

三田へ來られた時は、蝙蝠傘を片手に、小紋の羽織、襦袢、折といふ、至極輕便な旅装であつた。三田町で西洋小間物店に立寄つて、西洋酒の瓶を出させ、ペロ〜と張紙を讀んで、一瓶を買つて行かれたと言つて、三田人は珍らしさうに喧傳した。三田では九鬼家に一泊しただけで、有馬に一二週間居られたらう。

此際僕は二三の青年と、有馬に福澤先生を訪問した。マア泊つてゆけといふことで、共に二泊したが、先生は腹部の工合が悪いと言つて、臥床して居られたが、其夜寢物語りに、ナポレオンの歴史談を聞かして貰つた。

其翌日は横濱の丸善の社長早矢仕有的氏が來られた。是れは同氏が社用で、神戸へ來合せて居ると聞いて、先生から呼に遣つたので、忙がしい中を繰合せて、一泊掛で見えたのである。此早矢仕といふ人は、元は横濱の梅毒病院の院長で有つたが、大の商賣好きで、終に其病院を辭し、福澤氏と結託して、丸善社を起した人である。彼は元來大酒家であつたが、酒は商業上信用上に、大害ありとして、全く禁酒したる程の熱心家であるから、其商業も中々活動的である。

此日僕は初めて早矢仕氏に面會したのであるが、福澤早矢仕二氏は、親切に僕の方向につき共に談考して呉れられた。僕は此時二十七歳で

年も既に過ぎ、且家族を養ふべき責任のある身であるといふ所から、金の無い者が學問するのは贅澤であるとの主義に基き、學問の道を求むるよりも、直に實業に従事する方が宜敷からうと、茲に方針が定まつたので、一ト先づ一ヶ月程丸善の店に遊んで、商業の實見をする約束を、此時したのである。然し乍ら僕の如き精神上、見識上に缺陷を生じて、不満を懷いてをる者をして、直ちに僕の性質に不適當な、商業方面に導びかれたのは、謂はゞ失敗前の失敗であつたと、後には思ひ知つたのである。

京濱間。

横濱の丸善。

僕が横濱の丸善に行つたのは、明治五年の六月であつた。當時丸善は境町に在つて、角が書物店中が藥種及藥劑店、其隣が診察所となつて居つた。内部は一つであるが、店は三つに區劃してあつた。醫者も居れ

ば、書生も居れば、番頭丁稚も居れば、遠國の商人も止宿してをる。早矢仕といふ人は頗る商業に熱心な人で、席の暖まるを覺へずといふ調子で、夕に定めた事は翌日直に着手する。横濱の店は丸善善八で本店であるが、東京、大阪、其他に、丸屋の支店が出来て行つた。當時は創業早々で、未だ慶應義塾の出身者は居らなかつたが、將來に同校の出身者を容るゝ基となつて居つた。僕が此店に居つたのは、一ヶ月餘であつて、別に商法上の經驗を嘗ることも出来なかつたが、然し僕が將來に基督教徒と成つたのは、此丸善に於て其縁を與へられたものと思ふ。尤も丸善に居る醫學生の中には、ヘボン氏の所に通ふ人もあつたが、絶て是等の人から、宗教上の噂を聞いた事も無つたから、教會といふものゝ有ることすら知らなしたのである。然し早矢仕氏から、支那出版の基督教の書類を一束ほど貰ふて、之を三田の白洲氏に送つたことがある。何ういふ考へであつたか、多分未信

者に在つては斯る書類は厄介なものであるから、之れを他に移さんとして送り先なく幸ひ三田の白洲氏は、歐化主義者であるから、何乎の参考にといふ考で、送つて下さいと言つたのであらう。送りは送つたが定めし白洲氏も迷惑したであらうと思はれた。其時僕は天道湖原一冊を早矢仕氏から貰つたが、彼は何んど考へたか、進上しても宜敷ひが、些かでも代金を頂戴しませうといふので、代金として壹朱を拂つたのであつた。之れは即ち僕の信仰を引起す、天よりの第一の書翰である。然し直ちに此書が信じられたといふ譯ではない、半信半疑の間は、随分久しかつたのである。

其頃或人から、天に人の如き心を持つてをる神があるといふ事だが、君は如何に思ひ給ふやと問はれて、僕は天は即ち理なりといふ、朱子の語を引いて、道理といふ者はあるであらうが、心があることは思はれぬと答へた。其頃は先づ其様な思想であつたのである。

太田町の小店

丸善に居る間は、二ヶ月ばかりであつたが、其中に横濱太田町に小さな西洋小間物店を出すことになつた。之れは神戸にある志摩三商會に、關係のあるものである。志摩三商會の事は、後に委しく述べやうが、矢強三田人の合併會社である。僕も此會社員の一人であつたから、横濱に居つても、同會社とは關係がある。同會社に於ては創業の際なり、横濱に支店を置くの必要はないが、何乎取次所位のものには有つてもといふ考から、太田町に店を開くことゝなつたのである。然し雜貨店とは名のみで、丸善の土藏に、賣れ残つてあつた品を列べた位であるから、少しも賣れない。最つと資本を入れるやうに、本店に追つても、本店では横濱で利益を得る、商賣をする積でないから、更らに應じて呉れない。僕は商人とも附かず、書生とも附かず、此に一年計り暮してゐたが、時折才取に連れられて、競市杯に行く、檀那取扱にされ

て、毎時でも賣れない品物を買つてくる。其れは其等、何ういふ品が賣行が善いかなぞの事は、考へにさへも起らぬ位であつたからである。であるから月々喰込になつて往く。益すく自暴になつたといふやうなことで、確かなる目的は立ち兼ねたのである。然し乍ら此際僕に、基督信徒の心があつたならば、學者に成らうと、商業家にならうと、何れの道にも進み行く餘地が無いのではないが、飲酒の宿癖は、此頃益々其度を高め、精神は之れが爲めに、殘蝕せられてをるから、眞面目なる智慧も、心も起らないのである。今に始めぬこと乍ら、青年に飲酒は大禁物である。

飲酒放蕩の極點

斯くの如くで商賣は僕の始めての経験であるから、其道に疎いのは知れてゐるが、之れに加ふるに飲酒放蕩といふ、病毒が添ふたのであるから、此行路は無事に終るべきものでない。折柄太田町は地上げとなつ

て、暫時休業の止を得ざるに會したから、此時を利用して神戸行を企てたのである。此れとても社用の爲か、遊樂の爲か、分ち難きほどであるから、神戸の本社近くでも間隙に乗じて、豪遊を試みたのである。一週間程滞在して横濱に歸つたが、挟き神戸で其様な眞似を爲したのであるから、知れずには居れぬ譯である。僕も今度は神戸から、何と平言つて來るであらうと思つたから、當方より先を越すに如かずと、過飲の顛末を書して謝罪し、幸ひ地上げの爲、賣品は箱詰にしてあるから、精密なる計算書を附して、悉皆之れを神戸に送つた。勿論幾何の勘定不足を生じたが、之れは僕の株金の中から引去つて貰ふ事にしたのである。其後尙も暴飲を續けてゐたが、一夜泥酔して十二時過に歸宅し、ウトウトと眠りに就くや否や、心身忽ち非常の痛苦を感じ、殆んど絶息しさうであつた。ア、僕も之れまで乎と思つたが暫くして平常に復した。然し其時の感想は醒めても、尙忘れられぬのである。此に復た良心の

叫聲は喚起せられたかと思はれた。

元來僕の素志は、常に肉體上の生活を得るを以て、第一の目的とするものでなく、人生最善の道は何乎といふにあつた。以前は孔孟の教を以て満足してゐたが、今は既に歐化に蹂躪せられて、未だ之れに更はるべき者を見出さない。心身の浮足と、事業上の失意とは、益す僕を驅つて暴飲に沈ましめ、斯くして本心の希望と、身の行爲とは正反對の方面に進んでをるのであるから、良心の苦痛は更に甚しひのである。泥酔中の苦悶は、酒飲み本性違はずの譬へに漏れず、心中に於ける善惡二點の衝突の如くであつた。

兎に角其翌日も尙憂心忡々として、思はず机上の小冊子、小モラールサイアンスの譯書を取つて一讀したれば、其中に良心の事に就て論じた所があつて、而して其末文に、精神の慰安を得るの道は、聖書にあることが一寸書してあつた。之れは僕に取つて暗夜の光明の如く感じたのである。然し誰一人信者に面會するではなし、教會や會堂のある事さへ、知らなかつた時であるから、其後東京に出た後も、惰力的に飲酒を続け、相變らず遊冶郎を友として、日を送つて居つた。

第一の悔改

明治七年の春、東京車坂に假居してをる時、養母は重病に罹り、之れが爲に日夜看護の勞を取つたので、自然飲酒も慎まねばならぬ場合となつた。毎日少なくとも二三合は、必ず飲んだ者が、十日間程一滴も飲まずに居つたれば、不思議なもので、精神が何となく靜肅に、且眞面目になつて參つた。看病の餘暇曾て丸善で手に入つた、天道湖原を取出して讀んで見たれば、今回は往年閲讀した時と違ひ、大いに興味を感じたのである。再三熟讀するに従つて、信仰も生じてまゐつて、自動的に今後は清き生活に入るべく決心した。而して此時一旦は、全く酒も煙草も廢止したのである。

時は春上野向島邊を遊歩して、醉客の蹣跚たるを見て、ア、前日の僕は彼れた馬鹿な奴輩かなど、自からは曾點を氣取つて、天地と一枚になつたやうな心で居つた。然し此時の信仰は、聖書に所謂ヨハネの洗禮に入れたられたといふ時期で、未だ信仰の根據が確立せられてゐないから、甚だ危険な信仰なのである。

然し信仰は漸次に進んで、祈禱を始めようと思つたが、何のやうに爲て善いか分らない。於是天道湖原に書してある、祈禱文を朗讀した。毎飯謝恩文例、朝夕の祈禱文、主禱文等が漢文で録してある。始めは一々朗讀したが、後には誦誦するやうになつた。而して兎に角聖書は何んな書物か讀んで見たひものだと思つたから、日本橋通の書肆を五六軒尋ねたが無、其後淺草へ行く途中で、一軒の書肆に寄つて尋ねたら、有ますと言つて出して呉れた、價を問へば一圓だといふ。喜んで之れを買求めて、宅へ歸つて早速讀んで見たが、解し兼ねる所が多い。第一の疑

問はイエスを神の子とする點であつた。

此頃は久しく福澤先生の方へも、無沙汰をして居つたが、朋友中に福澤へ出入する者があつて、僕が信仰を始めたといふので、宗教上の福澤先生の意見を度々取次いで呉れたが、或時には賛成の意を表し、或時には冷評の意を漏すといふ調子で僕の信仰の益にはならなうたのである。其夏の事であつたが、築地六番にタムソンといふ、宣教師が居ると聞いて、此人に面會して疑問を質さうと思附たから、暑いのに日中態々尋ねて行つた所が、番地が違つてゐたのか、或は避暑不在であつたか、其様な人は居ないといふので、其他彼所を尋ねて見たが分らない、僕に神戸で信者に成れとの知らせであつたか、其日は空しく宅に歸つたのであつた。

僕の爲の二天使。

人は弱い者である。一旦酒も止め煙草も止めて信仰に進んだが、信者

の友とては一人もなく、聖書に疑ひはある。聞く談柄は冷評といふやうな寒風に吹かれたものだから、何時しか信仰も冷へ、又々酒も飲めば煙草も喫ふ、只心に残つて居るのは、何時ぞは聖書を研究して、信仰に入り度ひといふ思念のみであつた。是を以つて観ると、教會といふ者は普通信徒の爲には、必要なものである。必要な點は種々であるが、其第一は團隊の勢力に依つて、信徒を誘惑より救ひ、教會は藩屏の如く信徒を保護し、且つ向上發展を得しむるからである。

其秋の事であつた、神戸から九鬼子爵と白洲氏が出京して、久保町の江間といふ旅館に投宿した。此報知に接し早速尋ねて往つたれば、子爵も機嫌善く、白洲氏も相變らず洒々落落と時事を談じて居つた。其席には洋行戻りの客もあつて、西洋談で一坐は持切つて居つたが、其中客も去り坐も少しく静まつた頃、僕の顔色に何乎憂愁のあるを見て取つた白洲氏は、床の間から一冊の書物を取來つて、之れは子供の爲に求め

た、新版の譯書であるが、此中には中々善いことがあると言ひ乍ら、其書を展いて二三葉讀んで聞かせて呉れた、其大意は之れである。

『或日小學校へ通ふ童子が、家には學校に行くと言つて、兄弟相提へて山に遊びに行き、歸路を失ひ、山また山と終日迷ひ歩いたが、本街道に出るとを得ず、其中日は暮るし、疲れたまゝ、岩根に横つて居たれば、父と母とは心配して、諸方を尋ね歩いて、稍くのごとで其子を探ね出し、之れを家に連れ歸つたといふ一美談であつた。』

恰も僕の境遇に匹敵して居つたので、竊かに心胸を打たれたのであつた。子爵も白洲も信者ではないが、神戸で宣教師等と交際して、基督教を賛成し、僕等の如き者には獎勵する傾があつたのである。

其後、用事も有つて兩三回尋ねたが、或時白洲氏に、僕は近頃聖書を讀んで了解に苦しんでゐるのは、イエスを神の子とするの點であると言つたれば、彼は答へて『其れは君イエスは聖靈に孕まれたとあるではない

か、其れだから神の子なんださうだ』と言つて微笑した。實は彼は聖書のまゝを答へたので、多分これを感じては居らなうが、此一言は此時僕に取つて、大いに感動を興へられたのであつた。其後子爵から神戸に歸つては何うだと勧められ、僕も東京に居つても、別に面白い事も無いし、神戸に歸れば傍ら宗教上の研究も出来ると思つたから、神戸に行くのは會友諸氏に對して、少々面目ないが、今の私は前日の私では有りませんから、兎に角宜敷願ますと言つて、茲に約束が纏つて、僕は後から神戸に行くことゝしたのである。

神戸に於ける新生の僕

志摩三商會

僕が神戸に着したのは、明治七年の十二月であつたが、下山手通六丁目、今の青年會館の北手に、一軒の洋風の家屋があつて、周圍は一面に田畑

であつた。此家屋は志摩三の所有で、空屋となつて居つたので、此中の一부를借用し、此に住み込んで、日々會社に通勤することになつたのである。家内は養母と下婢と僕と三人、養母は常に臥病の人であつた。抑も志摩三商會とは、三田藩の重なる士分、即ち藩政を取扱つて居た、進歩派の一團十六七名相合して、結社したる會社の名で、總裁は舊藩主九鬼子爵社長は白洲退藏副社長は小寺泰次郎といふ顔觸であつて、本社は神戸榮町三丁目、今の正金銀行の所在地に、洋装の大家屋を新築し、店の一部は藥店であるが、重なる業は地家金銀を取扱ふ、今の銀行の如き者で、異なる所は公衆の金錢を預からぬのみである。日曜を休日と致し、同日は十時より一同三階に集り、些か宗教的意義を含みたる會合の下に、雜誌を試むるを例とし、會社員は宛然官吏の如くであつた。斯の如く外形は萬事洋風を摸擬したる、一大會社の如くであるが、内實の商況如何といへば、藩政改革時代に敏腕を振つた、白洲氏も所謂士族

秋聲
①



神戸に於ける新生の僕 神戸教會初參詣
の商法で馴ぬ商業に對しては、噴飯に堪へぬ事も多かつたであらう、果して數年の後に至つて、地家金銀の業は成功したが、藥種の方は失敗し、志摩三は九鬼家に納められたのである。然し乍ら數年ならずして同會社員は九分まで信者に成つた。受洗せなんだのは白洲小寺兩氏のみである。而てみると志摩三は信仰に於ては成功したものと云つて可なりである。

神戸教會初參詣

僕が東京に居る日には、神戸に往つたら教會にも往かうと思つてゐたが、倍神戸に來てからは事に紛れて、其事もせず、教會の所在地さへ知らない位であつたが、一日同勤の青年が元町の教會の事を語つて、若しお出でなら、御案内致しませうと言つて呉れた。此人は信者ではないが、曾て元町の會堂に往つたことがあるとのことであつた。「其れは兼て一度行つて見度と思つてをる所であるから、何卒次の日曜には是非と

も連れて往つて下さい」と頼んだ。時は確と覺へて居らぬが、八年の二月頃であつたらう。

次の日曜に彼の青年に連れられて、往つて見れば、表面は一の洋書店である。家の横合を通つて内に入ると、奥は廣やかな一堂で、三方に椅子が數十脚列べてあつて、中央には講壇がある。僕は隅の方に腰を掛けて、始めての事であるから、珍らしく思つて、見て居つたれば、其中に宣教師も入つて来るし、首坐の方には舊友の鈴木前田兩氏も居る。不思議さうに僕の顔を見てゐたが、出て来て挨拶をして呉れた。

午後三時の時計が鳴ると、嚙腕たる風琴がなりだした。此日は大阪のアダムス夫人が來合て居つて、美はしい聲で「けふ主が招く來れよ、夜路たどるさ迷ふ人」といふ歌を獨吟した。其から祈禱があつて、説教があつた。誰れの説教であつたか忘れたが、讚美歌だけは覺へてをる。僕は風琴の音も讚美歌も此時が始めて、恰も塵外仙境に入つた心地が

した。宗教は理屈にあらずして、高く清き靈味に浴し、知らず知らずの間に罪惡の汚穢より脱俗するものは、是等の消息を言つたものであらう。教會外にあつて、一人で信仰して居つた時よりも、一段の有り難さを感じたので、此日より今日に至るまで、毎日曜には必ず教會に出席するやうになつたのである。

神戸教會創立當時

抑も關西の傳道は、米國組合派に由つて着手せられたのであるが、第一に渡米したる宣教師は、グリーン氏である。彼は明治二年に來朝して、暫時東京に在留し、同四年神戸に移つたのである。最初に日本語の教師として、氏の家に入居したのは、市川英之進といふ人であつた。彼はグリーン氏と交際するの故を以て嫌疑を受け、京都二條の城に幽閉せられ、幽閉中病を得て終に牢死したが、此れは神戸に於ける、最初の殉教者である。然れども日進月歩の時節であるから、切支丹禁制の制札が、

未だ取除けられぬうちから、默許の姿で徐々に寛かになつて參つた。有名なる澤山保羅氏の如きも、神戸に於て、最初グリーン氏より英語を學び、遂に洋行したのである。松山高吉氏の如き、元は神祇官の官吏であつたが、基督教の渡來を憂ひ、國家の爲に撲滅せざる可らずとなし、之れを撲滅するには、先づ其教義を研究せざる可らずと思ひ、態々神戸に來つてグリーン氏に就いたのであるが、斯道研究中終に神の光明に接して信者と成つたのである。

神戸教會の創立は、明治七年の四月であるが、之れは各派を通じて關西に於ける第一の基督教會である。創立會員中の重なる人々は、松山高吉、鈴木清、前田泰一、夫婦、杉田勇次郎、甲賀ふじ子等の諸氏で、今日の神戸教會に比すれば、實に微々たるものであるが、

天國は芥種の如し、人これを取りて畑に播けば、萬の種より小けれど、も長ては他の草より大にして、天空の鳥來りて、其枝に宿るほどの樹

となる也。

この聖語は實に吾人を欺かざることを證するものである。而して當時關西に於ては、神戸教會と少し後れて、大阪に梅本町教會、即ち今の大阪教會あるのみで、明治八年の冬までは、同志社も未だ起らず、山陰、山陽、四國、何れを見渡しても、靈種の萌芽なく、天國の所領は茫々たる荒野原であつたのである。

僕の受洗

僕は一度教會に出席してからは、信仰上大に勢力を増し、一大速度を以て進み出したのであるが、其三回目の日曜日位に、横濱からバラ、奥野の二教師が見えた。バラ氏は頗る熱心家であり、奥野氏は當時有力の説教者であつた。兩氏の説教は幼稚なる僕の信仰に取つては、當時大に益せられたやうに感じた。而して毎週一二回デビス氏の宅に通つて、種々疑問を質して貰つて居

たが、當時デビス氏の宅は諏訪山下に在り、日本建の小さな借家二三軒を合せたもので、今の宣教師館に比すれば、牛部屋同様の矮屋であつた。此に學生として、三田人が兩人居たが、其一名は少年時代の杉田(元良)勇次郎氏と、他の一人は甲賀ふじ子であつた。

僕は例の如く一夜デビス氏宅へ往てをるとき、小野といふ青年も來合せて、三人デビス氏から神學上の教話を聞て居つたら、不圖惡魔は何から生じた者かとの論が起つて、中々難題となつた。デビス氏は躍起となつて、辯解を試みるゝが、疑問百出で際限がない。僕は空論の無益である事に氣付たから、善い加減に見解を附けて了つたが、杉田氏は解らないのが残念だと言つて、終に泣き出したので、議論は茲に終を告げた。今となつては、此時の此少年の涙は、後日彼をして博士たらしむる下心であつたと思はれる。茲に僕は信仰上の疑惑も、略氷解し、當時ギユリキ氏の宅に開かれる金

曜の祈禱會にも出席して、楽しんで自ら祈禱を捧げるやうになつたので、八年の五月デビス氏から洗禮を受た。志摩三に於ては九鬼子爵を始め白洲氏等が、案外に思つたやうであつた。左まで熱心に信仰せよとて、基督教を勧めたのではない、放蕩の悪習を打破する爲であるとは、兩恩人の心事であらう。其れゆゑに以來は僕の信仰に對して、八方妨害の奨勵が行なはれたのである。僕は熱烈なる信仰の進路を遮ぎらるゝことを好まなんだから、如何はせんと、一日店頭に在つて机上に憑り、此一事に就て、熱心に祈禱を捧げたれば、心中に斷然此を去るべしとの聲を聞たやうに感じたので、少しも疑念なく此聲を信じ、私に退店と決心したのである。

然し此舉は生活上差當り他に目的もなく、心竊に究困に陥るべく豫期せられたが、信仰の前途に紅海の開けたる歴史談を思ひ出し、斷然此舉の實行に着手し、早々白洲氏に僕の所信を述べて、退店を乞ひたれば、白

洲氏も僕の志のうごかす可らざるを見て、終に快よく其辭職を受容れられたのである。子爵は志摩三に對して、僕に何か不平でもあるものと思はれたか、或は僕の信仰を試みん爲か、一ヶ月の後人を以て、不自由はさせぬから、乃公の方に來ては何うだとの傳言があつた。然し僕は何所までも自由信仰の生活を望んだから、其厚意を謝して之れを辭じた。子爵は其使者に向つて、彼は眞の信者であると言れたさうである。而て見ると矢張信仰を試みられたものかとも思はるゝ。

明治八年の神戸に於ける青年信徒。

志摩三商會を辭した後は、居宅を今の中山手通六丁目、當時中宮村と言つた所に移した。此は穴居時代の跡を邸中に殘してをる、塚本氏一族を首に、十數戸圍つてをる部落で、其中に五六軒の信者が居たから、耶穌村と字せられた。僕は閑暇ある身となつたから、宣教師の聖書研究會は勿論、毎週二回デビス氏の宅に通つて、神學の研究に身を致してをつた。

然し何時までも無業で遊んでをる身でないから、何か適當な活路を求めねばならぬのであるが、幸ひ僕の相談相手に成て呉れる、一人の朋友が出来た。其れは今村謙吉氏である。氏は加賀の人で、元大阪梅本町教會創立者の一人であつたが、後神戸に移つて、ギユリキ氏の日本語の教師となつて居つた。

此今村と舊友前田と僕と三人申合して、元町三丁目の一の事業を始めたのである。今村は少し金を持ってゐたので、金主となり、僕は専ら事務を引受け、前田は、相談相手となつた。其事業といふは元町通三丁目、大きな家が明てゐたので、之れを借受け、一方の店を書物店として、これには英語の聖書類書を借入れて備へ附け、他の一方を干物店とし、二階を書生の下宿と、漢英二學の教場に當て、且何まれ萬般の委頼に應ずるといふ廣告を致し、社號を便利舎と名づけたのである。役者は今村、前田、北村、本間、小野及僕と其他に一兩名、各々分擔して事務に當つたので

あるが、専任は僕一名で、他は皆本務の傍義務的に時間を捧げたのである。早速四五名の寄宿人が出来、十名計英書を學びに来る者もあり、日々書生が遊びに来る、信者が立寄るといふ情況で、大いに青年信徒の懇親は得たが、中々利益を見るといふ場合には行ない。其年の冬京都に同志社が設立せられ、書生は過半其方へ往くことゝなつたので、便利舎は終に瓦解してしまつた。計算尻は幾何の損失を生じたので、今村と僕が之れを償なふたのである。

明治七八年の兵庫縣下の傳道

明治七八年の兵庫縣下の傳道は、三田が第一である。同所は舊藩主が、西洋主義の鼓吹者であつた爲に、教を受ることが他よりも早く、明治七年にデビス氏は單騎、六甲越に此地に傳道の門戸を開いて、既に幾何の信者が出来、早くより教會の設立を見るに至つたのである。姫路、明石、住吉、西宮、尼ヶ崎の如きは、當時ペレー氏が神戸病院の院長と

して各地に出張し、地方の醫師に、西洋の醫術を教授したる、其答禮として聖書を聞かせるといふ縁故から開けたもので、ペレー氏は醫師のことであるから。別の日に日本の兄弟を送つたのである。其傳道者は鈴木清、今村謙吉、前田泰一、小野俊次郎、杉浦義一、二階堂圓造及び僕であつた。尤も近き所は毎週出張したが、姫路の如きは、二三ヶ月目に一回位であつたと覺へてをる。

僕の傳道の初陣は其姫路であつた。其れはタルカット女教師の書生に、田島善子といふ人が有つたが、此人は姫路の儒者田島蘭水といふ人の娘で、英學を學ぶ爲に來て居つたので、謂ば第一の女學生である。夏期避暑に際し、暫らく親里に歸らせようとして、姫路の傳道を兼ねて、彼の女を送り届けるやう、僕は依頼されたのである。於是彼の女を田島に送つて往て、而して同家に二夜止宿を許され、二日の間午前は病院の醫師に傳道を試み、夜分は田島でも講義をしたのである。田島氏も毎

夕獨酌の後、塾生と共に拙なき僕の聖書の講義を聞けたが、勿論タルカット氏に對するの禮ではあるが、氏の謙遜をも爰に知ることが出来る。田島氏に三女があつたが、善子は其長女で、浪華教會創立當時の盡力者、小泉氏に嫁し、次女たか子は澤山保羅氏に嫁した。田島氏も後には大阪に於て全家信者に成られたさうである。

明石其他近傍の地は、大抵毎週缺さずに往たが、金曜の夜申し談じ、土曜の日から兩三人手を別ち、日曜を掛け二泊掛で、各地に出掛て行くのである、其頃傳道地として振つたのは、三田の次は明石であつた。

明治七八年の神戸在留宣教師

神戸に於ける第一の宣教師は、グリーン氏であるが、明治七年より聖書翻譯の爲に、松山高吉氏と共に横濱に移られた、同年新島襄氏歸朝せられ、京都に同志社を設立せられたので、デビス氏の全家は京都に移らるることゝなつた。而して、之れに代つてアツキンソン氏が神戸教會を

神戸に於ける新生の僕 明治七八年の神戸在留宣教師

擔當し、且つ四國中國の播種に力を致されたのであつて、岡山、高知、今治、松山の如きは、A氏に依て傳道の門戸が開かれたのである。明治八年の一月神戸に於て初めて、基督教の雜誌七一雜報の發行を見るに至つたが、之れは主に「アメリカン・ポート」宣教師の企圖に因るもので、オーエツチ、ギユリキ氏主任の下に、今村謙吉氏は社長として、印刷一切を引受け、僕は編輯を擔當したのである。七一雜報發行當時は、他に同種類の新聞一枚もなく、同八年より十六年に至るまでは、獨舞臺の基督教新聞として、各派の購讀を得たのである。醫師側には、ベレー氏神戸病院院長として、縣下の傳道に便利を與へ、テラ氏は神戸より大阪に移住の後、兵庫、仲町の兩施療所に通勤盡力し、一方に於ては醫術と醫師を益し、他方に於ては窮民を救ひ、而して間接には人靈救済の導火を與へたのである。女教師としてタルカット、ダットレー二姉は、二天使の如く、各教會及び

各傳道地の間に往來し、タルカット氏は主として、英和女學校、即ち今の神戸女學院を創立して、我邦女子教育の卒先者となり、ダットレー氏は神戸女子神學校を起して、傳道界に功を致したのである。

神戸教會の發展と多聞、兵庫二教會の萌芽。

當初神戸教會の費用は、全く宣教師の負擔であつて、日本信徒は些かも關知する所でなかつた。會堂番と宣教師の間に諸拂は行はれてを、然し只一つ日本人の權に屬する者は、會堂内のレブタ箱である。毎月五六圓は義捐金があつた。執事は此金を以て近傍各地の傳道費と爲たのである。

其中に教會は非常な勢力で發展してまゐつて、徐々に布教の自由を得ると同時に、元町の説教所も、表の書店を廢して、集會所に取り入れ、眞の教のななしといふ提灯を釣下るやうになつた。其れでも聽衆は益々増加して、場所が狹隘となつたので、終に北長狹通五丁目、地所を買入

神戸に於ける新生の僕 神戸教會の發展と多聞、兵庫二教會の萌芽

れて會堂を新築するの運に進んだ。専ら其任に當つた人は鈴木清氏である。此募集は神戸教會員が一般に公然神に献金するの濫觴であつて、川本氏の百圓は其折の筆頭であつたかと記へてをる。此舉は神の祝福の下に速かに成功し、明治十二年松山高吉氏を聘して、第一の牧師となしたが、其後僅か數ヶ月にして、神戸教會は全たく自給獨立するに至り、宣教師の手を離れたのである。

明治八年の頃神戸市相生橋以西、湊川以東に住む、神戸教會の信徒一團となつて、多聞通有馬道西入る山側に一字を構へ、別に集會を開いたのが多聞教會である。此團隊も神の祝福の下に數年ならずして自給獨立の運に進んだのである。教會創立當時にあつては、二階堂圓造、山田良齋二氏の如きは、同教會の爲に盡力したる主なる人であつた。同八年の頃兵庫木戸町に、テラ氏の施療所が設けられ、毎日曜の夜アツキンソン氏を頭に、神戸より青年信徒交互傳道したる結果、十數名の

信徒を生じ、彼等一團となつて教會の萌芽を形造つたが、僕は此團隊に招かれ、明治九年の頃より、専ら此方へ盡力することになつた。此團隊は兵庫の土着人十名と神戸の信徒四五名より成れるもので、全く兵庫の施療所に孕まれたる、兵庫教會の萌芽である。

兵庫教會創立當時

兵庫木戸町に瓜虫といふ人の空屋があつた。間口が八九間、奥行が庭とも十間餘、廣き家なので、其半分を施療所に用ひ、他の半分は空屋となつて居たが、程なく其表が驚達といふ人力屋の帳場になつて、常に六七名の車夫が群をなしてゐた。丁度其奥坐敷が明てゐたので、僕の一家は其家に住込むこととなつた。其前年僕は前川倉子と結婚したから、此時は三人の家族である。而して兵庫へ移轉したのは、十年の二月であつた。二階は物置同様で居所に用ふる所は階下の二室であるが、入口の室は板一枚で、表の車夫と隣合せであるから、其の騒々敷こと言ん

方なしで、毎晩飲酒放歌時としては喧嘩もする。此時代の車夫は今の
と違ひ、雲助風で餘程亂暴のやうであつた。是れも道の爲と此矮屋に
辛抱して、毎日神戸の七一雜報へ通勤を致し、教會の爲に働く時間は、土
日の兩日と夜分だけである。殊に當時は人の少い時分であるから、屢
々神戸にも多聞にも、應援に出掛たのである。

維新以前は神戸は村落たるに過ぎなかつたが、兵庫は船舶の輻輳する、
盛んなる湊であつた。いけに、至つて古風な所で、十年の頃にはまだ湊川
以西では、牛肉店の影だに見えぬ位の所であるから、固より基督教など
は、容易に受容れらるべき地ではない。左れば神戸の方の進歩の著る
しきに引かへ、兵庫は進歩が甚だ遅々として居つた。然し出來得る限
り、東西南北の各所に傳道を試み、辻々に路傍演説を爲した事もあるし、洗
湯の二階で浴客を集めて傳道したこともある。
神の恩恵により徐々ながら、教會の形體を成すに至つたので、僕は明治

十年の十一月二十四日をトして、按手の就任式を受けたのである。日
本に於ける牧師の受任式は、第一が澤山保羅氏で、其次が僕であるが、未
だ珍しい時分であるから、諸方から澤山人が集つた。而して未だ本邦
人側の牧師の無い時分であるから、宣教師が多かつた。男宣教師八名、
女教師十三名、本邦人の主なる人は、新島氏夫婦、市原、鈴木、今村、本間、上代
の諸氏であつた。デピス氏議長席につき、諸氏よりの神學上の質問を
了り、デピス氏の按手祈禱を以て就任式を結了したのである。
木戸町は兵庫の本通で人通りも多く、且や施療といふ傳道の好機關が
有つたから、徐々ながら信者も出來たが、惜ひことには、其翌年になつて
から、瓜虫の家は地所ともに全部警察よりの買上となつて、止を得ず他
に家を移さねばならぬことゝなつた。
執事と共に一週間毎日兵庫中を探し廻つたが、借家はあつても基督教
と聞ては誰も貸して呉れ人が無い。詮方つきて一策を按じ、兵庫に信

用ある醫師川本氏に懇求して、兵庫の古家で俗に正直屋といふ人の借家を借りて、二三年其所に辛抱して居たのである。其間の事は別に書すべき事もないが、僕が兵庫に居る時に、アツキンソン氏と共に高知に傳道したことがあるから、序でながら左に記しておかう。

明治十一年の高知傳道

岡山に中川横太郎といつて、同地傳道當初には道の爲に、種々周旋した人があつたが、政治上の關係で高知の板垣氏と交際があつたと見え、其は明治十一年の五月であつた。實は當時にあつては、高知の如き氣風の所へ傳道に行くのは、人の危険に思ふ所であつたが、兎に角板垣氏承

諾この點に安心を得て、アツキンソン氏を頭に、僕と他に一人の青年と一行三人、五圓計りの聖書類書を携さへ、浦戸丸に乗て出發したのである。高知へ着してから先づ板垣氏の宅を訪問しやうと思つて、アツキンソン氏同道で、道々尋ねながら行く其途中、川堤の所で、一人の紳士にあふた。年の頃は四十前後、ステッキを持って獨りブラ／＼歩いて來る様子が板垣氏らしく感じたから、近寄つて板垣さんのお宅は何所でありますかと問ふたれば、君達は神戸からですか、拙者が其板垣ですマアお出なさいと言つて後へ引戻し、先へ立て案内をして呉れた。同邸に到り坐談數刻の後、氏の厚意により鏡川に添ふた、一小莊を貸し與へられ、茲に一ヶ月間滞在することゝなつた。而して萬事は自由黨に依て組織せられたる立志社の斡旋を得たのである。此時片岡健吉氏は國事の爲め東京で拘留中とかで、高知には居れなかつたが、然し植木枝盛、竹内綱、栗原亮一等の志士が居つて、盛んに政談演説が行はれて

したので、演説堂も古き建物を假に用ひたものではあるが、六七百を容
る廣かな所であつた。

此演説堂で隔晩に、植木、栗原二氏も加はつて、彼等は學術演説を、我等は
基督教に就て共に演説をしたのである。竹内氏は何時も傍聴で演説
は爲なんだ。板垣氏は二回ほど裏口の方で聞かれたやうであつた。一
般の聴衆は毎會大入で、随分受られたやうであつた。後年此會で始て
教を聞いたといふ信者に、二三人出遇た事を記へてをる。
高知滞在中は毎日寓所へ尋ねて来る人も多くあつて、持て行つた聖書
類書は皆賣れて了つた。歸りの時は海岸まで數人に送られて船に乗
込だが、高知といふ所は外海と入江との通路が狭いので、潮時や風の順
逆を計つて船を出すから、一旦船に乗込んでも度々出直しをさせられ
る事があるが、此時も其日に出帆すべきものが、夜半か明日に延たこの
事であつた。

然し日暮頃から風も止み、空も隅なく晴れ、月は皎々と江上を照し、書も
ならぬ風景を現じたのである。折から二八を一つ二つ越しと思はる
る令嬢が下婢を随へ、小舟を漕せて此浦戸丸に、僕等の一行を訪れたの
である。彼の女は板垣氏の令嬢で、父の代としてアツキンソン氏を見
送りに来たこのことであつた。板垣氏の令嬢と聞て浦戸丸の船長英
人某氏は、兄弟して客室に出来たり、種々茶菓なぞ出して饗なしたが、兩
人とも中々の藝者で、珍らしき數種の樂器を持出し、交互に之れを鳴ら
したり弾たりして、兩客を慰さめたのである。時に窓外を眺むれば、月
は江心に浮び、四山の夜色は愛すべく、遠近を行きかふ小舟の櫓の軋る
音までが音樂の如くで、神戸の波止場聞くに比しては、數倍の雅致が
あるやうに覺へた。思ひ設けぬ此一時、餘りの快樂に、過日來の勞を
醫せられ、船長兄弟の厚意を謝したことであつた。其中客は去り、僕等
は寢室に入つたが、夢の中に船は浦戸を離れた。

是れぞ高知に於る第一の傳道であつた。其後は夏期を利用して、同志社から宇野作彌氏が、一回傳道した位で、其まゝ久しく打絶えてゐたが、凡そ十年の後期熟したと見え、日基も組合も同時代に傳道に着手するに至つたのである。

安中巡遊傳道

心機一轉何時までも世間知らずに、一地方に居るよりも、些と世間の空気を吸ふが善からうとの考へから、七一雜報と兵庫教會を他の兄弟に托して、上州安中の傳道に出掛たのである。安中は新島先生の生れ故郷であるが上に、湯淺次郎といふ義俠家もあり、殊に海老名正氏が同志社卒業當時直に傳道に着手された地で、彼の靈腕を以て耕した所であるから、信徒の信仰は中々振つてをる。

一例を舉れば教會は小弱の教會であるにも係らず、自給獨立であつた。

献金の法は會員各々欲する所に従がひ、無記名で之れを喜捨箱に投ずるのである。其で會計上一言の文句なしに、必要の金圓は拂はれてをる。全く湯淺氏の負擔に依るのであるが、斯の如きは會員の損金の精神を弱からしむるが如くであつて、其實は獎勵の法である。僕は地方の教會が自給を爲し得ず、會員互に讓合をなし、或は教會を自家以外の贅物の如く、取扱ふのを視ることに、安中教會のことを思ひ出さないことではない。僕は何れの教會員も湯淺氏の信仰に倣はれんことを希がふ者である。同時に氏が其義俠を知らず顔する謙遜にも倣はれたきことである。

僕が安中へ往たのは明治十四年の十二月であつたが、途次東京虎の門表の、小崎牧師の教會に出席して、同牧師の説教を聞き、其翌日旅馬車でコッ／＼と上州に向つたのであるが、段々進むに従つて寒氣も増し、街道は凍てをるから、何度も馬は滑るし、日は暮れるし、寒風に晒されて馬

車の上で顛へてをつたが、僕に取ては初ての遠征で些か心細そき感じ
がした。

借安中に着て見れば、土地としては甚だ無趣味の所であつた。遠方に
は浅間、妙義、榛名の高山は見ゆるが、近くには山らしき山も川らしき川
もなく、一面に桑畑計りで、家といへば九分は杉皮屋根の一筋道である
から、神戸を見た眼には實に田舎である。然し乍ら兄弟姉妹の愛と、在
方の信者の熱心なものには感心の外なかつた。日曜なぞには寝てをる
うちから、信者に起される位であるから、手後れると食事する暇も無ほ
ごであつた。僕は安中の兄弟に戯れて「此地は眼に映する土地の疎野
な點からは、無趣味な處であるが、兄弟姉妹の愛は之れと相反してをる
から、恰も物質上の不足を心靈が補つてをるやうだ」と言た事がある。
當時安中を中心にして傳道した所は富岡、松井、田原、市杉、名土、鹽等、毎月二
回位傳道に出掛たかと思ふ。傳道の模様は神戸邊の宣教師中心とは

全く趣きを異にし、湯淺氏の如き名望家の紹介によつて、町村の有志家
が傳道師を受け、食事宿泊を備へ、集會の宿をも爲て呉れるのであるか
ら、歩いてさへ行は費用は入らぬのである。

僕が安中に居た中に、前橋に茂木といふ信者が居ると聞たから、一日尋
ねて往たことがある。茂木氏は學校の教員であつた。同宅に一泊し
て家族の望によつて、創世記の講義をして共に祈つたが、當時前橋には
茂木氏のみで他には一人も信者が無つた。其前希臘教の信者が一時
起つたさうだが、其頃は其噂さへ聞かなんだ。翌日市外まで茂木氏に
送られて、別れを告げたが、數年の後總會で同氏に面會した時には、氏は
教師となつて列席せられてをつたので、喜悅の握手を交換したことで
あつた。

僕が安中に傳道したのは、半ヶ年餘りの短日月であつたが、是れまで宣
教師と共に傳道して居た僕に取ては、修業傳道で、大いに裨益を受けた

と感じてをる。

大阪の福音社

僕が神戸に歸つた後に、七一雜報の發行人である、オ、エツチ、ギユリキ氏が、新潟に行くやうになつたので、七一雜報は廢刊となつた。然しながら七八年間七一雜報に由て印刷事業の経験を積んだ今村謙吉氏は、其少し前から福音社と號する合資會社を組織し、元町に聖書と類書（註）の小店を開き、山手で印刷製本の事業を爲てゐたので、七一雜報廢刊と同時に、同會社を大阪に移轉する事に決し、七一雜報の代に福音新報と稱する週刊の小新聞を發行して、其編輯を僕が負擔することゝなつた。蓋し大阪に、オ、エツチ、ギユリキ氏の舎弟ジョン、ギユリキ氏が居つて、兄の事業を引受けたからである。福音社が大阪に移轉したのは、十六年の秋であつた。社長今村氏を始

め職員十六名、大阪西區土佐堀三丁目に一字を構へ、矢張福音社と號して、廣く印刷製本の需めに應じ、僕の一家も其二階に同居して、福音新報の編輯に従事して居たのである。

神戸から行つた十六名は皆信者であるから、一團となつて一教會を設立すべき考へもあつたが、宣教師側から一と先づ大阪化してから後の方が宜敷からうといふ説が出て、終に十六名は四分して、四人づゝ大阪、浪華、天満、島の内の四教會に入會する事となつたが、今村氏は大阪の闇を引き僕は天満の闇を引いた。

當時は大阪教會に宮川經輝、浪華教會に澤山保羅、島内教會に上原方立、天満教會に古木虎三郎といふ、組合派の牧師の顔觸であつたが、他に英米監督、日基等の教會と牧師諸氏もあつて、新たなる交際に信仰の益を受ること少からずと感じたことである。

明治十七年の初夏から、僕の一家は玉江橋の二丁目に居寓することゝ

なつたが、此夏から秋へかけては、僕の一家は頗ぶる鍛練の時期であつた。脚氣病に罹た親戚の青年が、僕の家で病歿するやら、三歳になつた僕の男兒が、腸結核を煩らつて就眠するやら、悲哀の事が重なつたのである。

今も尙記へてをるが、大阪は水の悪い所で、其頃には水道はなし、頼む所は大川の水である。雨降續きで濁つた時には、汲込んで沈澱して、上汁を用ふるのである。兒は病の爲に咽を渴かして、水よ水よといふなれども、水は濁て温ぬるい、其上に暑さは暑し、裏の空地ではドン／＼チャ／＼と、夜中地響をさせて益躍りをはづましてをる。僕の精神の休みは未明に大川に出で、未だ汚れて居ぬ清流を汲上て、之れに口滌いで、祈禱を捧るの時であつた。幸に大阪には澤山、宮川の如き牧師があつて、常に信仰の益を得たが、一年間の大阪滞在は僕に取ては、試練の時機であつたのである。然し後に経験した艱苦に比すれば、是等はいろは

たるに過ないが、其時には随分辛かつたのである。其秋に至つて僕は復び兵庫教會の招聘を受け、爰に今村氏と袂を分つことゝなつたが、今村氏は僕が教に入つてよりの、信仰上の兄弟であるのみならず、事業を共にしたる朋友であつた。彼は又日本に於る基督教的印刷事業の開祖である。十数年の後に此福音社は倒れたが、此會社より出て福音社の事業を繼續し、益々盛大ならしめつゝある繼續者のあるは歴然見るべきである。東京警醒社の福永文之助、同北文館の葛岡龍吉、大阪福音社の矢部外次郎、神戸の土井捨吉諸氏の如きは、皆今村氏の福音社から生れた人である。

兵庫教會會堂新築と自給獨立

明治十七年の十月僕の全家は神戸に歸り、下山手通七丁目に假寓したが、當時兵庫教會は衰微の極に陥り、不振の状態であつたが、此中に只一

兵庫教會會堂新築と自給獨立

つ眞元氣となる要素があつた。其れは何乎といふと、會堂新築の希望である。曾て居留地の會堂の寄附箱の金二百五十餘圓を、兵庫教會に寄附された事があつたが、此金を基礎として更に寄附を募り、千百有餘圓を得たので、永澤町二丁目をトして、百三十餘坪の地所を買入れ、此に會堂を新築したのである。教會の艱難の日にも集會を廢せず、忍耐して祈禱を續けたる十二三名の信徒は、實に兵庫教會の生命であつた。會堂新築の後には、全會俄に春めき、信徒も増加し、十八年の十二月に至つて、教會は全く自給獨立を得たのである。

以上は明治二十年以前のことであるが、是れより後のことは近代に屬し、信徒間に知られてをる事が多いから、此に書すの必要が無からうと思ふ。只一言すれば、明治十七年から二十四年の冬までは、僕が四十歳から五十歳までの年間で、僕の生涯中の好時機ともいふべく、僕に取つては極點まで昇りつめた時機であつて、廿五年遠征を四國に試みたる

時は五十歳に近く既に降り坂となつてをる時機であるから、此記事は此に止め、感謝を以て筆を擱くことゝした。

自評

以上記憶のまゝを隨筆したる後、自ら惟んみるに、僕の幼時は一寸俊才のやうであつて、其實は資性柔弱決して俊才でない。若し俊才ならば、如何なる境遇に居るも、其境遇を利用して、卓出する筈であるが、僕に於ては至る所境遇に制せられて、其れ以上に出ることが出来なかつた。是れは僕が平凡に終つた所以である。然し乍ら又一方より考ふれば、若し僕をして現代の教育を受しめたならば、如何であらう乎、今少し優つた者と成ることを得たであらうと思はれる。然らば境遇と教育と朋友とは、人才を成すに必要、缺く可からざるの具であつて、受授者兩方に於て大いに意を用ふべき點であると思ふ。

自評

加之僕に於ては飲酒放蕩の中毒によつて、一時方向を誤つたから。此際
基督教の救済を受るとが無かつたならば、縦令年と共に普通の生活を
得るに至るとしても、精神上に於ては無意味惨憺の生涯に終つたであら
う。幸ひに僕が暗黒失意の眞直中に於て、神の光明に接觸し、精神の開
發を見るに至つたのは、地獄で佛に遭遇たといふべきである。

然れば高山に登らんと欲して、谿谷に彷徨ひ、清潔の行爲を欲して其身
濁水を飲み、或ひは方向を誤まり、凡て失意の境遇に居る人に對して僕
は殊更に基督を紹介したのである。人生の方向を指示す羅針盤は
基督である。人生の行路を照らす光明は基督である。人生の峻坂を
攀るに當つて、之が後援者は基督である。孤獨寂寞頼る邊なきの時に
當つて、之れが慰藉者たる友は基督である。

イエス曰く、我は世の光なり我に従ふ者は暗中を行す生の光を得る
なり。(約翰傳八章十二節)。

又曰く、凡て勞たる者また重きを負る者は我に來れ、我汝等を息ませ
ん。(馬太傳十一章廿八節)。

又曰く、我は復生なり生命なり我を信する者は死ることも生べし、凡て
生て我を信する者は永遠も死ることなし。(約翰傳十一章廿五六節)。

自評

回顧終

大正元年九月十八日印刷
大正元年九月二十日發行

定價金貳拾錢

不許
複製

著者 村上俊吉

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 福永文之助

印刷者 橫濱市太田町五丁目八十七番地 村岡平吉

印刷所 橫濱市山下町八十一番地 福音印刷合資會社

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 警醒社書店

賣捌所 東京市本郷區春木町二丁目廿三番地 警醒社支店

と 刊 近 と 刊 新

内村鑑三氏著

■ 獨立短言

定價五十錢
郵稅六十錢

皆田篤實氏著

■ 母の典型

定價五十錢
郵稅六十錢

パンヤン作
松本雲舟氏譯

■ 恩寵溢るるの記

定價十二錢
郵稅十二錢

山田寅之助氏著

■ 基督傳

定價二圓

松村介石氏著

■ 天地人

定價四十錢
郵稅六十錢

千葉律彦氏譯

■ 現代的基督教

定價未定

村上俊吉氏譯

聖書衍義

定價十五錢
郵稅四錢

小崎弘道氏著

■ 余が廿五年の經歷

定價二十六錢
郵稅二錢

徳永規矩氏著

■ 逆境の恩寵

定價四十錢
郵稅六十錢

宮崎湖處子譯

■ スアチウナガ 懺悔錄

定價七十錢
郵稅六十錢

加藤直士氏譯

■ トルイス 我懺悔

定價四十錢
郵稅六十錢

西川光次郎氏著

■ 心懷語

定價五十錢
郵稅六十錢

回顧二十年

特價 八十錢

弊店創業廿年の記念出版也。廿にちなみて二十名家の執筆を請ひて其の寄稿を得たり。筆者の芳名は左の通り

故デフォレスト氏、

故デヴネス氏、

故大西祝氏

徳富健次郎氏、

元田作之進氏、

高木壬太郎氏

海老名弾正氏、

島田三郎氏、

村田勤氏

小崎弘道氏、

宮川經輝氏、

浮田和民氏

松村介石氏、

原田助氏、

内村鑑三氏

波多野精一氏、

留岡幸助氏、

成瀬仁藏氏

植村正久氏、

星野光多氏、

825
165

京 東
店 書 社 醒 警

325
65

終